平城京羅城門跡発掘調査報告

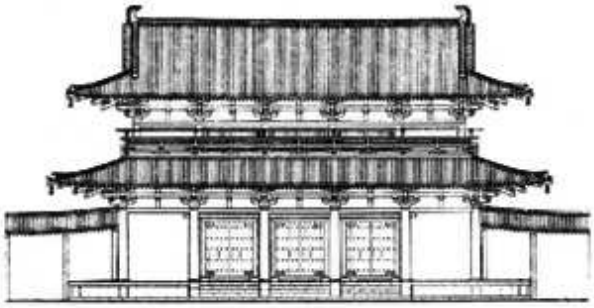
（第一次～第三次発掘調査）

9 7 2・3

大和郡山市教育委員会

平城京羅城門跡発掘調査報告

（第一次～第三次発掘調査）



1972·3

大和郡山市教育委員会

はじめに

平城京羅城門跡は佐保川にかかる来世橋の改修にあたって，礎石等数個が発見されて以来，発掘によるその究明が期待されていました。たまたま川の東側の奈良市側で次第に開発が進行してきたので，奈良市教育委員会の手で昭和44年夏，来生橋東側付近の発掘調査が実施されました。不幸にして川の氾濫による攪乱がはなはだしく，成果をあげるに至らなかったのですが，その結果，羅城門の究明が川の西岸の郡山市域の側に期待されることになりました。かくして郡山側の識者の要望もあり，上記の期待にそって，郡山市でも計画が進められ，国庫の補助を受け，昭和45年３月から４月にかけて，大和郡山市教育委員会の主催の下に奈良国立文化財研究所の協力を得て，第二次の発掘調査を実施しました。幸い，遺跡の残りがよく，朱雀大路の西側及び，九条大路の北側の溝や築地跡などが発見され，門跡の位置にも迫ったのでしたが，たまたまその場所が，金魚池の下になっていて，発掘の運びに至らず，やむなく他日を期することとなりました。

その後ようやく期が熟して，土地所有者の承諾も得て，今年２月から３月にかけて，第三次の発掘調査を実施しました。調査は郡山市教育委員会と奈良国立文化財研究所が協力して行なわれました。かくして，佐保川堤防の際で羅城門基壇の西端を明らかにすることができ，門の正確な位置と規模が推定可能となったのであります。

今後，大和郡山市としましては，調査の補足を行なうと共に，門跡一帯の地域の保存を計画しなければならない段階になりますが，とりあえず，第一・二・三次の発掘の成果をまとめて公刊し，この方面に関心を持たれる方々の御要望に答えると共に，大方の御批判を得たいと思います。

本書の刊行にあたり，終始協力をいただいた奈良国立文化財研究所の方々の御苦労と心よく土地の使用を許された土地所有者の方々に深甚の謝意を表します。

１９７２年３月

大和郡山市教育委員会

目　　次

はじめに

Ⅰ　平城京羅城門跡を追って …… 1

Ⅱ　調査の経過

1.　概　　要 …… 3
2.　調査関係者 …… 4
3.　調 査 日 誌 …… 5

Ⅲ　遺　　跡

1.　遺跡の状況 …… 7
2.　第一次発掘調査 …… 9
3.　第二次発掘調査 ……10
4.　第三次発掘調査 ……12

Ⅳ　遺　　物

1.　土　器 ……15
2.　土製品 ……18
3.　金属製品 ……18
4.　木製品 ……19
5.　瓦　類 ……20
6.　大和郡山城天主台使用の旧礎石 ……28

Ⅴ　考　　察

1.　羅城門の復原 ……30
2.　出土埴による築地の復原 ……32
3.　羅城門跡付近の瓦について ……33
4.　文献にみえる羅城門 ……35

Ⅳ　む　す　び ……38

図 面 目 次

PLAN 1　Ⅱ-A トレンチ実測図
2　Ⅱ-B～D トレンチ実測図
3　第三次発掘調査遺構実測図
4　羅城門付近条坊復原図

図 版 目 次

PL. 1　羅城門跡付近航空写真
2　来生橋・第三次発掘調査地
3　第三次発掘調査区遺構全景
4　羅城門基壇
5　朱雀大路西側溝延長部・同護岸石・暗渠
6　朱雀大路西側溝・西側築地・九条大路北側溝・北側築地
7　朱雀大路西側築地と瓦転落状況
8　朱雀大路西側溝護岸しがらみ
朱雀大路西側築地瓦転落状況
9・10　大和郡山城天主台石垣の礎石
11　軒丸瓦
12　軒平瓦
13　平瓦・面戸瓦・丸瓦・瓦質土器
14　人面土器・釘・帯金具
15　銭貨
16　棰

挿 図 目 次

Fig. 1　昭和10年発見の礎石（岸俊男氏提供）…… 1
2　昭和10年発見の礎石配置図（岸俊男氏提供）…… 2
3　羅城門跡付近地形図…… 7
4　第一～三次発掘区配置図…… 8
5　第一次発掘調査…… 9
6　Ⅱ-A トレンチ東西土層図……10
7　Ⅱ-B トレンチ南北土層図……11

8　Ⅱ-C トレンチ南北土層図……12
9　Ⅱ-D トレンチ南北土層図……12
10　羅城門基壇断面図……13
11　第三次発掘調査区南北土層図……14
12　第三次発掘調査区東西土層図……14
13　出土土器実測図……16
14　土馬……18
15　土管……18
16　帯金具……18
17　出土硯……19
18　軒丸瓦……23
19　軒丸瓦……24
20　軒丸瓦……25
21　軒平瓦……26
22　道具瓦，丸・平瓦……27
23　大和郡山城天主台使用の旧礎石……29
24　羅城門推定寸法　その1……31
25　羅城門推定寸法　その2……31
26　出土硯による築地復原図……32
27　軒瓦組合せ……33
28　平城京条坊図……37
Tab. 1　軒瓦計測値・出土個体数表……22

I　平城京羅城門跡を追って

平城京羅城門跡の存在に最初の手掛りがついたのは昭和10年の佐保川来生橋改修の時であった。西佐保川岸近くで川底から花崗岩質の礎石らしいものが発見され，当時の奈良県技師岸熊吉氏が見とどけられたのはその年の五月であったらしい。３つの石が岸にそって橋から北20メートル程の間で発見され，その後10月に工事関係者によって，見取図が作られたようで，その資料が残っている。そしてその際北端の右の東へ3.5メートル程離れて今１つの石が新たに発見されたらしい。

見取図によると４つのうち最南端のものは形状も小さく，特に石そのもののスケッチがつけられている。それは長さ90センチ，幅65センチ，厚さ30センチで，表面の略中央に経10センチ，深さ10センチの円穴が図され，それにそって石の端まで幅10センチ，長さ15センチ，深さ10センチの枘穴が描かれている。その仕事から見て，扉の下を受ける唐居敷と察せられるが，扉軸をはめた円穴と方立（戸当り）の仕口とされる枘穴の関係位置が実測されていないし，この石が柱礎石にどのようにとりついていたか痕跡を追求したいがそれは他日の再検討を待つ他はない。

それはともかくこの図から察して，羅城門の唐居敷として大きさも申分ない。他の３個も長方形である点から，常識的には礎石と直観できないが，大きさは長さ1.1メートル乃至1.2メートル，幅90センチ乃至１メートル，厚さ60センチ乃至90センチとあって，そのままこの門の礎石に用いて大きさから不都合はないし，昨年西隆寺東門跡で見出された礎石も長方形であったのであるから，その可能性は充分ある。しかしこれらの礎石の相互位置は乱れており，今回発見した土壇の現上面（表面はかなり削りとられている）よりも約２メートル下になるので，位置は動かされているものと認められる。

これらの礎石の発見により，この来生橋付近が羅城門の位置で，その遺跡の存在も予想さ

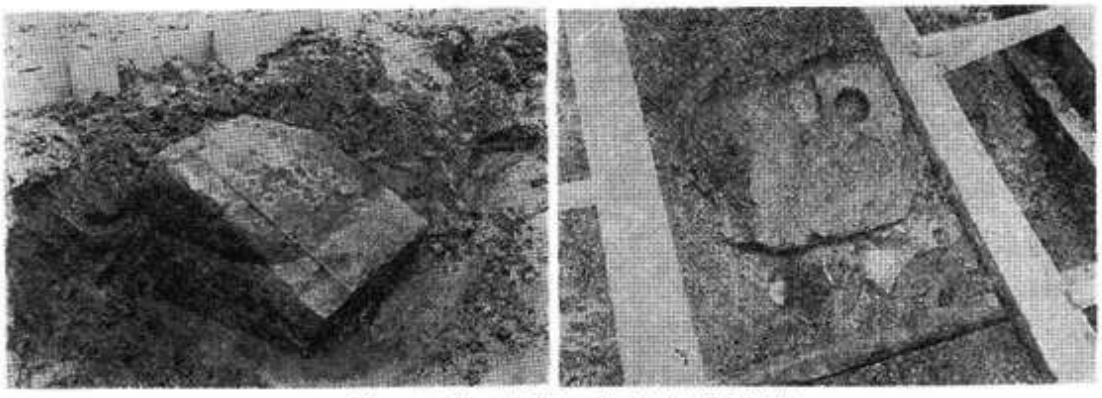


Fig. 1　昭和10年発見の礎石（岸俊男氏提供）

れ，解決の日が期待されてきたのであるが，それから3分の1世紀たった去る44年の夏7月から8月にかけて，佐保川の東側で奈良市によってその調査が計画され，故梶本亀次郎氏が中心となって発掘が進められた。不幸，川の氾濫で撹乱されていて，遺跡の追求は不可能であったが，川を挟んで東西の溝が川の西と同様，東でも南に迂回していて，門の廻りで敷地が拡げられていたことが認識された。こうして川の西側に期待が寄せられることとなり，翌45年の3月から4月にかけ，郡山市が主催して，奈良国立文化財研究所の協力により，第二次調査が行なわれた。その結果朱雀大路の西側と九条大路の北側の溝や築地跡や羅城外の濠の北岸が発見され，門の位置も的確に指摘できるに至ったが，その場所が金魚池になっていて，調査を他日に見送る他なかった。

その後ようやく機熟して，今年2月から3月にかけて第三次の発掘が行なわれ，遂に羅城

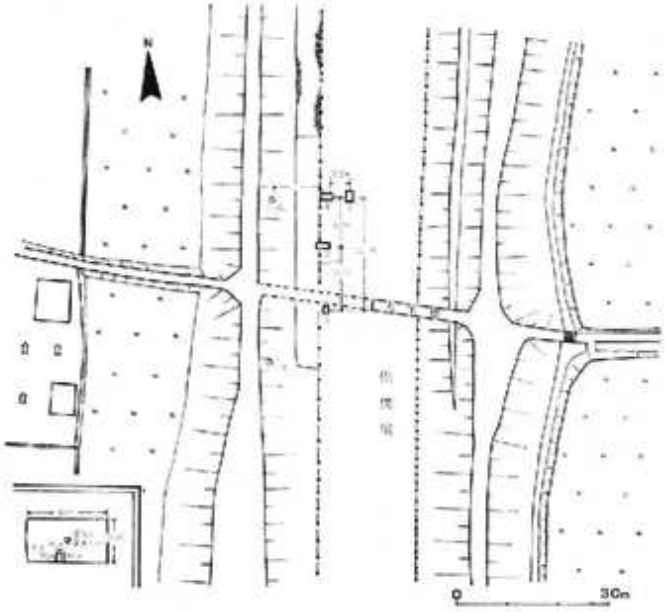


Fig. 2　昭和10年発見の礎石配置図（岸俊男氏提供）

門基壇の西端と北端を確認し得た。そこには粘土や砂利混り粘土の互層からなる突き固め土壇が高さ約60センチ程残り，その少し外方に土壇を築くにあたって地山を掘り下げた境も見出されたので，疑う余地は全くない。

それではこの上にどれ位の大きさの門が建つかということになると，それを確かめるには礎石をぬき取った穴が発掘できると好都合である。今回の発掘ではそれを検討できなかったが現時点での発掘知見からすると，五間三戸の重層門が推定できる。平安京の羅城門は九間七戸とされてきているが，案外小さいことは予想外であった。それについてはなお朱雀大路の実際の幅を確認する必要もあり，羅城外の濠なども門の前でどのようになっていたか追求しなければならない。すでに門跡の存在は確実となったのであるから，次は一刻も早くその保存問題にもとり組んでいくべき時に到達しているのである。

Ⅱ 調 査 の 経 過

1. 概 要

平城京羅城門跡は，古くから郡山城の東方の佐保川にかかる来生橋の付近にあるといわれてきた。

1935年，奈良県は佐保川の改修工事を行なったが，この際，来生橋付近で4個の礎石が出土した。これによって羅城門の所在位置が確められ，遺構の存在が実証された。しかし礎石の出土状況から門の大部分は佐保川の河川敷下にあることが予想され，発掘調査による遺構の検出は困難とおもわれた。その後，最近まで礎石の一部は川の水量の増減によって見え隠れしていた。

1961年，平城宮跡は西大寺周辺の急速に進む開発により，破壊の危機に直面していた。平城宮跡を守れという声が一斉におこり，全国的な保存運動が展開された。その間，関係者の努力で，遺跡の全額国費買い上げということで，ひとまず平城宮跡の保存はきまった。一方，これに関連して，識者の間や文化庁（当時，文化財保護委員会）では，平城京跡，なかでも南都七大寺旧境内の史跡指定をふくむ保存対策が検討されていた。文化庁はまず，南都七大寺（東大寺・西大寺・興福寺・薬師寺・元興寺・大安寺・法隆寺）の史跡指定の方針をたて，それを実施した。

またこの南都七大寺史跡指定の一環として，平城京羅城門跡と東・西両市跡の保存が識者や文化庁では問題にされていた。ところが，奈良市の都市計画にともなって羅城門跡付近は工場団地に予定され，南奈良区画整理事業団が実施にあたることになった。文化庁は奈良市の都市計画は平城京を復原的に残すような方法で実施するよう指導していた。この計画はその地域の古くからの地形を一変させるとともに，なかでも幹線道路九条線は，直接羅城門跡を横切る可能性があった。そうした中で，奈良市は平城京跡の保存を都市計画に組みいれ，羅城門跡を都市計画公園として，区画整理で用地を確保する保存計画を進めた。

1969年3月，文化庁は奈良市に，羅城門跡を含む，朱雀大路の史跡指定を正式に申し入れた。こうした動きをうけて，奈良市では平城京跡保存調査会（樋本亀次郎代表<元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長>）を発足させ，平城京の計画的な保存のための研究活動を実施した。

1969年7月，平城京跡保存調査会の調査研究活動の一環として，また羅城門の史跡公園化の具体的資料をうるため，奈良市は国庫補助をうけ，総額60万円（国30万，奈良市30万）の予算で発掘調査を実施した。発掘調査は奈良市教育委員会が主催し，樋本亀次郎を団長に，中村春寿（県立奈良高校教諭）・金関恕（天理大学助教授）・松下正司（奈良国立文化財研究所技官）が主となって行なった。発掘調査は羅城門跡東側の遺構を明らかにするため，佐保川東側の堤防下で実施した。ところが調査地一帯は佐保川のかつての氾濫で，地層がみだされ，顕著

な遺構は検出できなかった。

その後，比較的洪水の影響の少ないとみられる大和郡山市側の水田一帯の発掘調査を行なえば，羅城門の遺構が把握できるのではないかという期待が，調査関係者の間にもたれるようになった。

1970年3月，郡山市は遺跡の発掘調査の持つ重要性から，ひきつづいて羅城門跡第二次の発掘調査を実施することになった。その間，郡山市では羅城門跡保存会（柳沢尚子会長）が結成され，調査実現への強い援助があった。発掘調査は同庫補助をうけ，総額120万円（国60万，郡山市60万）で，浅野清（大阪工業大学教授）を団長に，中村春寿・狩野久（奈良国立文化財研究所史料調査室長）・高島忠平（同技官）・弓場紀知（九州大学大学院生）が主となって実施した。調査地は佐保川堤防西側の水田である。羅城門の遺構の存在が考えられる佐保川堤防に接した金魚池は，金魚養殖の関係から，発掘が不可能となり，調査はその周辺の水田に限定された。発掘の結果，朱雀大路西側溝・九条大路北側溝・京の南端と築と推定されている遺構の残存状況が予想以上によいことがあきらかとなった。また，都市計画道路九条線が，羅城門跡を横切ることは確定的となり，金魚池の発掘は羅城門の正確な位置を知るうえで，早急に実現が望まれた。ところが，土地借り上げ・補償問題など，多くの困難があり，調査は引続き実施することができなかった。

羅城門跡保存会は，発掘の早期実現を関係当局にはたらきかけ，郡山市会では，平城京西市跡を含めて，羅城門跡の発掘保存が問題にされるなど，調査の機運が盛りあがった。また，文化庁は羅城門跡の指定に関連して再度係官を派遣し，その実施を協議した。

1972年2月，郡山市教委は235万の補正予算をくみ，土地の借り上げ，補償問題を解決し，奈良国立文化財研究所と共同で，羅城門跡の第三次発掘調査を実施することになった。

第三次発掘調査は，浅野清を団長に実施した。調査地は羅城門跡の存在するとみられる佐保川堤防に接した金魚池の南半に限定した。その結果，羅城門基壇をはじめ，朱雀大路西側溝延長部・暗渠を検出し，所期の目的を達することができた。

2. 調査関係者

第一次発掘調査

団長　藤本亀次郎（元奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）

中村春寿（県立奈良高校教諭）・金関恕（天理大学助教授）・松下正司（奈良国立文化財研究所技官）・川尻利一（奈良市経済部長）・片岡勉（同主幹）　　協力者　南奈良区画整理事業団

第二次発掘調査

団長　浅野清（大阪工業大学教授）

中村春寿・狩野久（奈良国立文化財研究所室長）・高島忠平（同技官）・宮沢智士（同）・伊東太作（同）・森郁夫（同）・石松好雄（同）・黒崎直（同）・弓場紀知（九州大学院生）・小森信彦（大和

郡山市教育委員会)・木下平一(同)

協力者　田中安孝・西川繁久・堀部敏雄・宮本庄七・藤川政次郎・中田嘉四郎・谷野清治

第三次発掘調査

浅野清(同長)・中村恭寿

奈良国立文化財研究所　坪井清足(平城宮跡発掘調査部長)・八賀晋(同室長)・細見啓三(同技官)・伊東太作(同)・横田拓実(同)・佃幹雄(同)・高島忠平(同)・菅原正明(同)・岡本東三(同)

大和郡山市教育委員会　堀川武史・植本繁寿・永原圭仲

協力者　米田三平・石田貞夫・森田義一・新藤勝

3.　調査日誌

第一次発掘調査　1969年7月28日～9月15日

7・28　鍬入式　A～Dトレンチ設定。午後Dトレンチ南半表土除去開始。

7・29　砂層下に泥土層あり。湧水激し。

7・30　Dトレンチ南半に東西方向の溝状遺構。溝底よりスラッグ検出。トレンチ北半表土除去。トレンチ東壁崩壊。砂層中に近世の土器出土。

8・2　Dトレンチ南半に粘土層上にうすい褐色土がのる基壇状の硬い面を検出。

8・3～4　Aトレンチ発掘開始。表土除去。Aトレンチ表土下約50～60cmで粘土層となる。Bトレンチ発掘開始。

8・6～7　Bトレンチ遺構検出。表土下約80cmで粘質砂土の硬い堆積面があり，その層中より近世の漆器椀が出土。

8・8　Cトレンチ表土除去。南端に新しい時期の井戸2基検出。

8・9　Bトレンチの砂層の上部粘土層上面に近世の建築遺構の一部を確認。砂層を1m以上掘り下げると，湧水激しく発掘不能。

8・10　Aトレンチの南半の畦畔を切断。表土下50cmで鉄混りの褐色粘土層の硬い面がある。

8・11～14　各トレンチ遺構検出。いずれも礫・砂層が互層となり，川の氾濫による堆積とみられる。

8・15～17　作業休み。15日記念物課調査官平野邦雄，文化財専門委員井上光貞・関野克・大岡実・浅野清の各氏来訪。

8・18～22　各トレンチ南地区清掃。写真撮影。実測。

8・23　雨天のため作業中止。

8・24　補足調査。

8・24～9・15　埋め戻し。調査終了。

第二次発掘調査　1970年3月9日～4月13日

3・9　鍬入式。用具搬入。現場小屋敷地の整地。発掘地区の設定。

3・10　Aトレンチ設定。発掘開始。表土下の暗褐色土中に中世の遺物を検出。

3・11　一部坪掘りを行ない，地表下1mに奈良時代の遺物の包含層を認めた。

3・12　トレンチ内南端に中世の南北溝を検出。溝中より漆器片出土。

3・13　トレンチ内外側で，南北溝2条，南側で東西溝を認めた。朱雀・九条大路の両側溝か。

3・14　両側溝の埋土を掘土。瓦片多量。若干土器片を含む。

3・15　朱雀大路側溝下層の砂土から和同開珎・木簡各1点検出。九条大路側溝の南岸を追求。

3・16　雨天のため作業中止。

3・17　Aトレンチ（東西方向）南北畦畔下で黄褐色土築地遺構検出。その両側に瓦が堆積。九条大路北側溝から和同開珎一枚。

3・18　E地区南へトレンチ拡大。瓦の堆積は，屋根から転落したままのものと判明。九条大路北側溝底まで検出。

3・19　発掘作業なし。奈良市側にある第一次調

査の測量原点を移動。雪激し。

3・20 測量原点をコンクリートで固定。市道にBトレンチ設定。ただちに発掘開始。E地区トレンチを拡大。一面に瓦の堆積を認める。

3・21 Aトレンチ実測準備。一部発掘清掃。Bトレンチをさらに掘り下げる。土硬く作業困難。

3・22 朱雀大路西側築地は掘り込み地形と判明。実測準備。Bトレンチ内で予想した礎石わからず。午後，雨天のため作業中止。

3・23 AトレンチC地区で九条大路側溝に流れこむ2条の暗渠を検出。築地との関係から，東側の暗渠が新しい。Bトレンチを南の水田へ延長。西方の水田にDトレンチ設定。発掘。濠状の堆積土を認む。

3・24 Aトレンチ写真撮影。Bトレンチ床土下の砂層より灯明皿が出土。Dトレンチ南端でも濠状の堆積を認む。濠は南へのびるもよう。砂上より，奈良から平安の土器出土。Bトレンチ南側の道路にCトレンチ設定。

3・25 Aトレンチ実測。Bトレンチ青色粘土層に達す。Cトレンチに礎石の根石状のもの検出。新しい層上にある。古老の話では観音寺と野垣内の村境の石臼がすわっていた所だとのこと。Dトレンチ南方で試掘。

3・26 Aトレンチ実測。Bトレンチ南で濠状の堆積を確認。Cトレンチ内南側に砂層，Dトレンチ内でも同様の濠状堆積を認む。京の前面にかなり広い濠があるもよう。

3・27 Aトレンチ実測。Cトレンチを南へ拡張。Dトレンチを道路へのばす。

3・28 Aトレンチ実測。Cトレンチ拡張部分で新しい東西溝を検出。Dトレンチをさらに掘り下げ硬い砂質の面を検出。

3・29 Aトレンチ平面実測完了。Cトレンチ内南側さらにさがるもよう。発掘困難。

3・30 Aトレンチ補足調査。Bトレンチ実測。Aトレンチ一部埋め戻し。

3・31 Aトレンチ土層実測。B・Cトレンチ実測。Aトレンチ埋め戻し。

4・1 B・Cトレンチ実測終了。Bトレンチ道路南肩下で青色粘土の地山が急にさがる部分を検出。濠の北岸とみられる。

4・7～8 補足調査。埋め戻し。

4・9～12 埋め戻し。

4・13 埋め戻し終了。器材撤去。

第三次発掘調査　1972年2月1日～4月10日

2・1 鍬入式。表土除去開始。

2・2～14 排土作業

2・15 調査区東側地表下80cmで羅城門の基壇らしい黄褐色土からなる高まりを確認。

2・16～21 基壇から西側の黄褐色粘土層を排土。下は暗褐色土層。遺物は少ない。

2・22 調査区南西に硬い面があり，その土層から宋銭・明銭が出土。

2・23 さらに下層を排土。郡山城天守台石垣使用の山礎石を調査。

2・24 基壇状の高まりの断面を観察。版築状の土層を確認。

2・24～27 排土作業。

2・29 奈良時代の遺構の検出を開始。朱雀大路西側溝（南北溝）の延長部を検出。溝中に玉石を検出。

3・1～3 南北溝中に瓦多し。玉石は暗渠か。南北溝の北側は大きく広がる。溝中より和同開珎・帯金具出土。

3・4 調査区東側で曲った溝を検出。南北溝中より人面土器出土。

3・6 東側の溝は北方調査区外へのびる。南北溝排土。

3・7 南北溝の西側5mのところに幅1mの溝を検出。掘り方からみて木樋暗渠のものか。清掃。

3・8 写真撮影。

3・11 現地説明会。

3・13 実測準備。

3・14～15 実測。

3・15 補足調査。埋め戻し開始。

3・16 基壇掘り込み地形を検出。埋め戻し。

3・17～22 補足調査。築地の寄柱と思われる掘り方検出。埋め戻し。

3・24～4・10 埋め戻し終了。

Ⅲ 遺　　跡

1. 遺跡の状況

平城京羅城門跡は，大和平野の北辺部のほぼ中央にある。東には春日・高円の諸山が，北は佐保・佐紀の諸丘陵が，そして西方には生駒の山並みが望見される。奈良市，郡山市が境を接する所，行政的には両市に二分されている。また，春日の山地に源を発見する佐保川が北から南へ流れ，八条のあたりで秋篠川と合流してさらに水量を増して流れるあたりがこの遺跡の存在する所でもある。

羅城門跡のある一帯は，佐保川の河川敷をのぞいては水田地帯であった。現在は佐保川左岸では，北から工場用地が，南から宅地化の波が迫っている。右岸では，南から宅地化されつつあり，水田が金魚池化するものも多い。

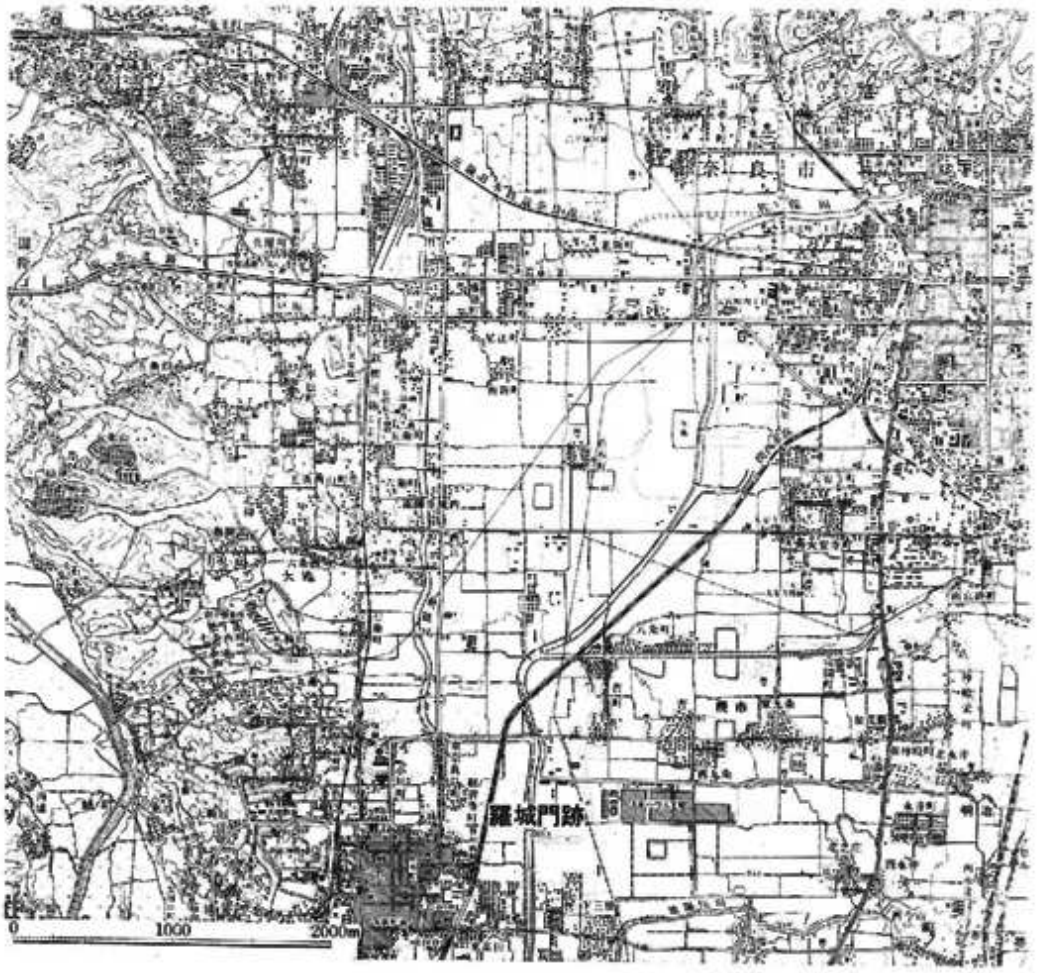


Fig. 3　羅城門跡付近地形図

ここ，佐保川にかかる橋は「来世橋」とよばれている。また，第三次発掘地である金魚池の南西には市道をへだてて，「らいせい墓」とよぶ墓地がある。この墓地の一角には，かつては小さな草堂があり，周囲に土塀がめぐっていたといわれるが，現在はない。墓石は年紀のあるものでは元禄年間のものが一番古い。

この羅城門跡付近を，地図・航空写真でみると，平城京の条坊が水田の畦畔によく残っているが，なかでも京の南限を示すあぜ道が来世橋を中心にして対照的に南へ張り出している様子が目をひく。このことは，1955年，大岡実を中心とした平城京の復原的研究の一環として，平城京の航空写真を作成した際，初めて指摘された。その後，前記の平城京保存調査会で行なった地籍図の字境を利用した調査でもこのことが認められていた。それが今回の三次にわたる発掘調査でうらづけることができた。

第一次の発掘調査は，こうした張り出しを予想しながら，九条大路と羅城の検出を期してⅠ-A～Dの南北方向のトレンチを設定した。

第二次の発掘調査は朱雀と九条の南大路にかかるように鉤手状のⅡ-Aトレンチ，羅城門の南端の状況をさぐるためⅡ-B・Cトレンチ，羅城を含めた京の南端の状況をさぐるためⅡ-Dトレンチを設定した。

第三次発掘調査は，それまでの調査で，羅城門跡が確実にあると予想される市道南側の金魚池北半の全面で行なった。

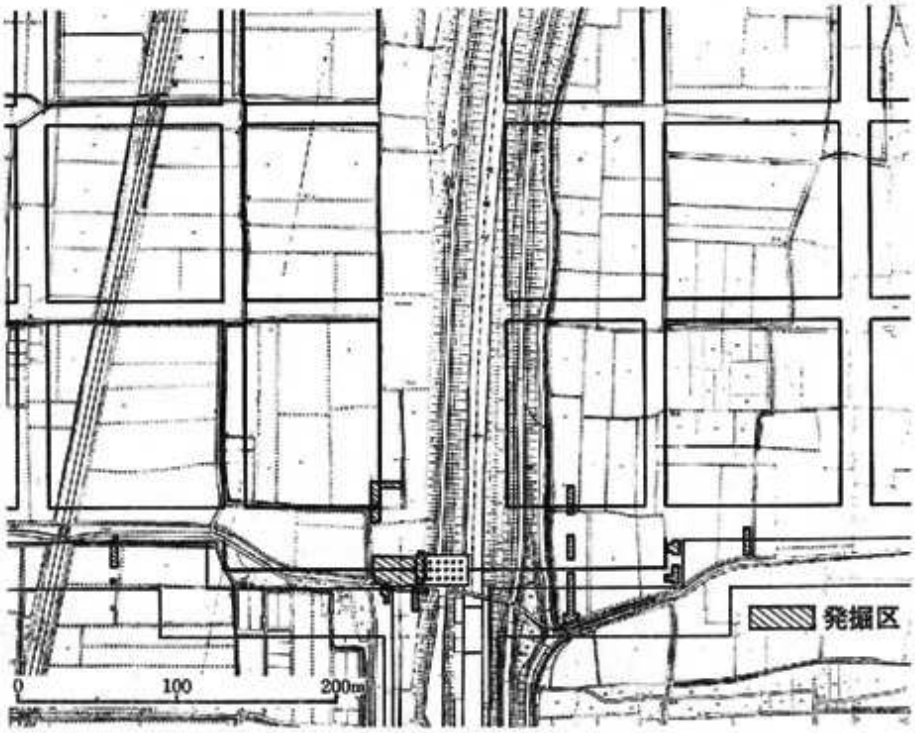


Fig. 4　第一　三次発掘区配置図

2. 第一次発掘調査

発掘地域は，佐保川の左岸にあたり，それ以前の遺構が流失したのち水田として耕作されていた地帯である。そのため，表土・床土下には50～150cmにわたって，細砂・バラス等の流失土が堆積しており，その下層は粘質土となっている。氾濫による攪乱と河川周辺の砂層からの湧水で発掘は困難をきわめた。また洪水による削平のために奈良時代と断定すべき明確な遺構を検出することはできなかった。

1-Dトレンチでは現畦畔直下で東西方向に青色粘質土の基壇状の痕跡と，北側に共伴する東西溝（溝幅約6cm）を検出したが，その時期は明らかにできなかった。その北部は灰色粘土が平坦に続いており，九条大路の北端と推定される位置に設けたI-Cのトレンチでは，築地および側溝等の遺構は検出することができなかった。なお，1-Dトレンチの基壇状粘土の下層には礫と砂の互層がみられた。

B地区においては，九条大路南端と推定される畦畔の延長線上に幅・高さ約30cmの土塀状の粘土塊を東西方向に約6m検出した。その性格，時期は明確でないが，粘質土上に築かれていた。

I-Aトレンチ南端では，畦畔を一部掘り下げたところ，厚さ約60cmの褐色粘質土層があり，北に傾斜して下っており，築地基底部北端かと想定されたが，その下層に細砂層がみられ，それに伴って北側に幅約2mの灰褐色砂質土の堆積した硬い面を検出した。これは中・近世の農道と考えることができる。なお，その北部は粘土層が次第に下って，地表下約2.5mで完全なバラス層となっている。バラスは1m以上堆積しているが，その上面に漆喰のブロックが数個検出できた。バラス中にはこれら漆喰ブロック片のほか磨滅した瓦・須恵器片，土師器片等がみられる。これら瓦・土器等の検出から，平安期ないし中世に川底であったことが想定できる。遺構は，試掘による小範囲の調査で，また湧水が激しくトレンチの壁面崩壊のため部分的にしか明確にしえなかった。バラスの堆積状況から東西に大きな水路があったものと考えられる。

この地区はこのように河川の存在なり，洪水があり，予想以上に後世の攪乱・破壊が大きいようである。

Fig. 5 第一次発掘調査

3. 第二次発掘調査

Ⅱ-Aトレンチ (PLAN 1 PL. 1 Fig. 6)

この地域の土層は，黄褐色粘土が地山で，その上に，暗褐色粘質土，茶褐色土，灰褐色土，暗褐色土，表土の順に堆積している。奈良時代の遺構は地山上面で検出される。このL字形トレンチの南のところでは，茶褐色土層に切りこまれた溝がある。この溝の埋土は青灰色砂質土で近世の遺物を含んでいる。なお，発掘区西北側では，奈良時代の遺構面よりさらに下層に深い溝の痕跡を認めた。京造営前の遺構とみられる。検出した遺構は，朱雀大路路面，朱雀大路西側溝，朱雀大路西側築地，九条大路北側溝，九条大路北側築地，暗渠である。

朱雀大路西側築地と九条大路北側築地は，調査地域外で交わるとみられるが，その入隅の部分は，後世の野井戸で破壊され，確認できなかった。両築地の内側一帯では，築地の瓦が転落したままの状態を検出した。両大路の各側溝は，朱雀大路で築地地形の東端から4m東，九条大路で築地地形の南端から3m南にある。築地と側溝の間は平坦地で，塀地にあたる。発掘区東側で，溝から東の平坦部分は朱雀大路の路面にあたる。暗渠は，九条大路北側塀地の部分に，南北方向のものを2本検出した。

朱雀大路西側築地 (PLAN 1 PL. 6-2・7) 地形は掘りこみである。検出したのは築地の基礎地形部分で，築地本体の幅はわからない。地形は幅4.3m，深さ20～30mで，黄褐色斑入りの暗褐色土で一様であり，とくに版築の痕跡は認められなかった。地形内で，東よりに，柱掘り形を検出した。1本柱の築地と考えられる。長さ3mの小範囲の調査であるので確定しがたい。なお，この築地の下層からは，瓦の堆積層と築地の痕を検出しており，少なくとも二回にわたる築地造作が考えられる。しかし下層の築地の痕跡はあきらかにできなかった。

九条大路北側築地 (PLAN 1 PL. 6-3・4) 地形は掘りこみである。検出した掘りこみ地形は，幅4.2m，深さ20～35cmで，土は黄褐色斑入りの暗褐色土で一様である。版築の痕跡はとくに認められなかった。なお，築地本体は削平され判らない。

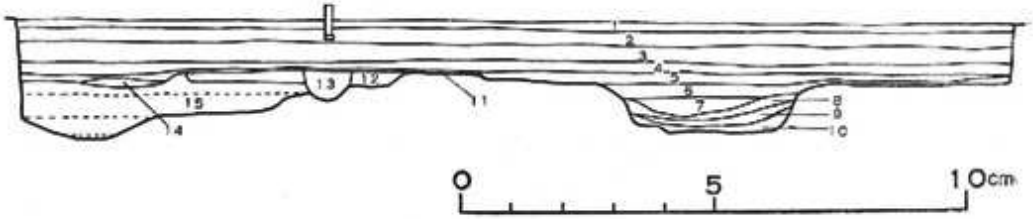


Fig. 6 Ⅱ-A トレンチ東西土層図

1. 表土 2. 暗褐色土 3. 灰褐色土 4. 茶褐色土 5. 暗褐色粘土質 6. 灰褐色粘土
7. 灰色砂土 8. 黒色砂混り粘土 9. 暗灰色砂土 10. 灰色粗砂 11. 暗茶褐色土
12. 黄褐斑入暗褐色土（朱雀大路西側築地地形） 13. 灰褐色粘土 14. 灰白色砂質土
15. 黒褐色粘土，（6・7・8・9・10は朱雀大路西側溝埋土）

朱雀大路西側溝（PLAN 1　PL. 6-1・8-1）　南北方向の溝で断面は逆台形をなす。幅4m・深さ90cmある。この溝は南へ流れる。東岸には護岸施設が残存している。それは木杭に木の枝をからませたいわゆるしがらみである。埋土は大きく分けて五層ある。(Fig. 5-6・7・8・9・10) 最下層の灰色の粗い砂層からは，和同開珎・木簡片・土器片・瓦片が出土し，最上層の灰褐色粘土層からは主として瓦が出土している。中間層は，瓦・土器などの遺物は少量であった。

九条大路北側溝（PLAN 1　PL. 6-3・4）　東西方向の溝で，断面逆台形をなす。幅3m，深さ70cmである。埋土は，下から灰褐色粘土，灰色砂土，黒灰色粘土の順に堆積し，いずれの層にも瓦片を含んでいる。最下層の灰褐色粘土層からは和同開珎が出土している。

暗渠（PLAN 1，PL. 6-3・4）　暗渠は九条大路堺地部分の調査区の東端と西端で2条検出した。いずれも南北方向である。東側暗渠は，掘り形は地表面に対して直角に近く切りこまれている。木樋の一部が残存している。掘り形の幅は今回，確認できなかった。

この暗渠は朱雀大路西側築地と九条大路北側築地の交叉する入隅の部分から，九条大路北側溝への排水の役割をはたす。もうひとつは木樋の残存は確認できなかったが，掘り形も同様のものである。築地入隅から西へ約3mいった所にある。築地内側から九条大路北側溝への排水の役割をはたす。両者の前後関係は後者が築地地形でこわされ，前者は築地に逆に切りこんでいるところから，前者が後者より新しいことが判る。

Ⅱ-Bトレンチ　(PLAN 1，Fig. 7)

検出した遺構は，段と濠状遺構である。発掘区の北側は道路にかかる。この部分は褐色砂の互層で，佐保川の堤防のかさ上げのたびに橋に通じる道路に盛土を行ったことが知られる。

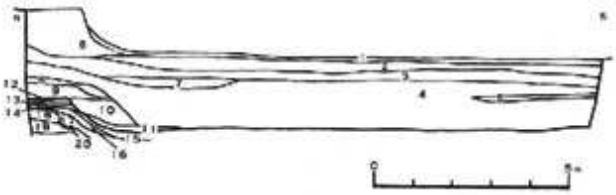


Fig. 7，Ⅱ-Bトレンチ南北土層図

1. 表土　2. 暗褐色土　3. 灰色粗砂　4. 青色粘質土　5. 茶褐色粗砂　6. 道路盛土　7. 茶褐色砂土　8. 褐色砂　9. 灰色小礫含土　10. 暗灰色粘土　11. 灰色砂　12. 灰色土　13. 灰色粘土　14. 灰色土　15. 暗灰色粘土　16. 灰色粘土　17. 暗灰色混り粘土　18. 灰褐色粘土　19. 灰色粘土・砂の互層　20. 暗灰色粘土

段（PLAN 2，Fig. 7）　この道路の盛土の下層は，10cm内外の硬い灰褐色砂質の土層があり，その下は非常に硬い灰色土層となっている。この層の上面は，トレンチ北壁より1.4mのところで段をもって南へ下る。また，この層の上面からは宋銭や蔵骨器が出土している。さらにこの層の20cm下には，灰色砂質土・粘土を交互に積んで比較的硬い層がある。この層の上面も，上層の硬い層と同位置で段をもって南へ下っている。これは奈良時代のものと

みられるが，この上端は第三次の調査で検出した羅城門基壇の上面よりは約1m低い位置にあり，門の基壇の一部とはいいがたく，門前の施設の一部であろう。

濠状遺構（PLAN 2，Fig. 7）　それより南は深い暗褐色粘質の濠状の堆積土がみられる。今回は底と南限を確め得なかった。

Ⅱ-Cトレンチ（PLAN 1，Fig. 8）

Ⅱ-Bトレンチと同様，段と濠状の遺構がみられた。堆積土の状況もⅡ-Bトレンチとほぼ同じである。道路下で観音寺と野外垣の村境の標識がすわっていた根石を検出した。これが道路下に礎石が埋っているといわれていたものの正体であろう。

Fig. 8　Ⅱ-C トレンチ南北土層図

1. 表土　2. 床土　3. 黄褐色砂質土
4. 灰褐色土　5. 6. 黄褐色粗砂
7. 青色粘質土　8. 褐色砂

Ⅱ-Dトレンチ（PLAN 2，Fig. 9）

ここでも，道路面下約2mのところに，硬くしまった厚さ10cmの黄灰色砂質土がある。この層は，道路南肩の下で切れ，ゆるい傾斜のさがりになり，それから南は灰色の砂層の堆積が広がる。これは，東方の調査区で検出した奈良時代より新しい中世以降の硬い土層と同じである。この層の下約50cmのところに青灰色粘土の地山がある。その間の土層は黒灰色粘土層で，土師器・須恵器と木質を含んでいる。検出した遺構は濠状遺構である。

濠状遺構（PLAN 1，Fig. 9）　青灰色の地山は，調査区北端から3m50cm南へいったところで段をもって約70cm，急に下る。これより南は黒色粘土の堆積する濠となっている。濠の南限は段の上端から約28cm南のところでもつかめなかった。京の前面にかなり幅広い濠の存在が考えられる。

Fig. 9　Ⅱ-D トレンチ南北土層図

1. 表土　2. 床土　3. 道路盛土　4. 灰色粘質土　5. 灰白色砂　6. 青灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土　8. 黒灰色粘質土　9. 灰色砂　10. 黒灰色粘土　11. 黒色粘質土
12. 灰色砂　13. 灰色粗砂

4.　第三次発掘調査

第三次発掘調査地は，現在金魚池で，表土は池底の泥である。奈良時代の遺構面は，その下0.8～1.5mで検出した。調査地の土層（Fig. 11・12）は，黄褐色の粘土が地山で，その上に暗褐色粘質土，灰褐色粘質土，青灰色粘土，茶褐色粘質土，黄褐色細砂質土，表土の順に堆積している。黄褐色粘土地山の上部は，鉄分の酸化沈着した黄褐色の斑点がみえる。奈良時

代の遺構はこの地山上面で検出した。暗褐色粘質土は瓦質土器・黒色土器片を含んだ平安後期以後の堆積層である。青灰色粘土層は，部分的に砂を含み，上面が硬い。この層中には，宋銭・明銭や瓦質の骨蔵器片を含んでいる。また，この層の上面から切りこんだ東西方向の溝が調査区南側にある。この東西溝の埋土は青灰色砂で，近世の陶器・曲物底・漆器を含んでいる。茶褐色粘質土層および，それより上の層中には近世の骨蔵器・陶器片が含まれている。

奈良時代の遺構を検出した面は，当時の地表よりは相当削平されている。それは羅城門基壇まわりで出土する奈良時代遺物のなかでも瓦の少なさ，基壇掘りこみ地形の浅いこと，雨落溝・基壇化粧石など，門の化粧施設がまったく認められなかったことなどからである。

調査区東側に羅城門基壇を検出し，その西側から約15mの調査区中央部に朱雀大路西側溝南延長部分があり，さらにこの溝の西肩から約5m西の所に南北方向の暗渠の掘り形がある。そのほか，羅城門基壇のすぐ西側に柱穴とみられる穴が4か所ある。

羅城門基壇（PLAN 3，PL. 4，Fig. 10）　検出した羅城門基壇地形は西辺と西北隅で，南北14.4m，東西4.4m，高さ60cmの部分である。南辺と東側の大部分は調査区外にある。掘りこみ地形端から，基壇の残丘裾までの距離は西側で約1m，北側で90cmある。当初の基壇はかなり削平をうけているとみられ，基壇化粧石や雨落溝は検出できなかった。柱位置をきめる礎石のすえ方は，調査範囲が東へ拡大できず，検出した部分では確認ができなかった。昭和10年の来生橋改修の際に佐保川の右岸より花崗岩質の礎石が4個（うち1個は唐居敷をもつ）出土した。現在これらの礎石は佐保川の川底にあり，今回検出した基壇上面より2m低い位置にある。羅城門基壇の規模は平城京朱雀大路の幅を平安京朱雀大路の幅と等しく築地心心

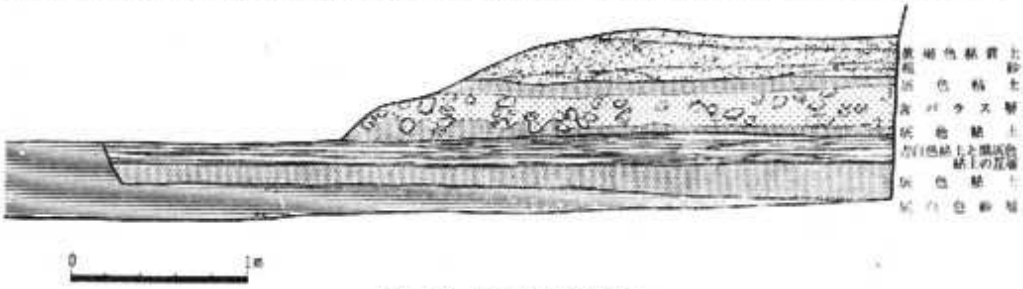


Fig. 10　羅城門基壇断面図

で28丈（約84m）と仮定すると羅城門跡第二・三次発掘調査結果より基壇東西幅は32.74mとなる。基壇南北幅は基壇南辺を検出していないが第二次調査のⅡ-Bトレンチで検出した段状の遺構の肩は，今回検出した基壇の上面より1m低く，むしろ今回発掘できなかった市道下に南辺があると予想すると，17.82mになる。

地形は掘りこみで，現状で深さ23cmある。地形はまず坑の下底の凸凹を平坦にならすため粘土を10～15cmの厚さに敷き，その上に順次版築をおこなっている。すなわち，粘土を12cmほどの厚さにこまかくつきかため，その上は礫と粘土で，さらにうえは砂質土と礫でつ

きかためている。

朱雀大路西側溝南延長部（PLAN 3，PL. 5－1～4）　羅城門基壇西面掘りこみ地形端より西へ14.5mのところに南北に走る側溝を検出した。発掘区の南端で溝の幅は5m（復原値4m）深さ0.8mある。発掘区の北端ではあふれた流水によって側溝両岸が大きくえぐられ扇形に東西15mほど広がっていた。

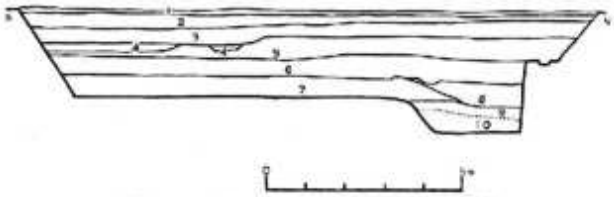


Fig. 11　第三次発掘調査区南北土層図

1. 表土　2. 黄褐色細砂　3. 茶褐色粘質土　4. 青灰色砂　5. 青灰色粘土　6. 灰褐色粘質土　7. 暗褐色粘質土　8. 青灰色砂　9. 砂混り黒色粘土　10. 黒色粘土

この溝は羅城門跡第二次の発掘調査のとき検出した朱雀大路西側溝の南延長部にあたり，羅城の下を貫通して京の外濠にそそぐものと考えられる。側溝の底東寄りに護岸に使用されたと思われる石（約30×40cm）が多数あった。石の一部は側溝東岸にあり原位置をとどめていると思われる。

溝内の遺物は平安時代のものも含んでおり，この溝は平安時代まで流れていたものと考えられる。

Fig. 12　第三次発掘調査区東西土層図

1. 表土　2. 黄褐色細砂　3. 茶褐色粘質土　4. 黒色土　5. 青色砂土　6. 青灰色粘土　7. 青褐色粘土　8. 灰褐色粘質土　9. 暗褐色粘質土　10. 黒褐色粘土　11. 灰黒色砂　12. 灰色粗砂　13. 黄褐色土　14. 黒色粘土　15. 羅城門基壇版築

暗渠（PLAN 3，PL. 5－5・6）　側溝西端より西へ3.1mのところに南北に走る幅0.9m，深さ0.4mの溝がある。溝は地表面に対してほぼ直角にきりこまれている。溝底は北から南に向って傾斜している。この溝は木樋の暗渠の掘り形で羅城の下を通る暗渠と考えられる。

推定築地寄柱穴（PLAN 3，PL. 4－2・5）　羅城門基壇西面掘りこみ地形の端より西へ0.4mと2mのところで南北に並ぶ柱穴を2対検出した。前者の柱間は2.7m，後者の柱間は4.2mあり，南の柱穴は東西にそろうが，北の柱穴は位置がずれる。

三次にわたる羅城門跡とその付近の発掘調査の結果，羅城門基壇，朱雀大路西側溝と同大路西側築地，九条大路北側溝と同大路北側築地，羅城の外濠が明らかとなり，平城京羅城門，築地（羅城），朱雀大路，九条大路の配置を統一的にとらえることができた。

Ⅳ 遺　　物

遺物は，主に朱雀大路西側溝やその延長部の堆積土や遺構面を覆う暗褐色粘質土中より出土した。新しい遺物は，表土下約1mの青灰色粘土層から宋銭・明銭・瓦質の骨蔵器等の中世・近世の遺物が出土した。

1. 土　器 (PL.13-4・5，14-1，Fig.13)

土器は朱雀大路西側溝から主として出土した。そのほかは断片であるので，ここでは朱雀大路側溝出土のものを紹介する。土師器30点，須恵器5点，黒色土器5点，瓦質土器4点である。

土師器　杯・椀・皿・甕・鉢形土器などがある。

杯（1）　口径は約16.1cmである。広い底部と浅い口縁部をもつものである。口縁部は外傾しながら，端部でわずかに外反する。端部内面は肥厚している。内外面ともに横ナデする。底部内面は螺旋状の暗文，側面には細かい放射状の暗文がある。緻密な粘土を用い，焼成も良好である。色調は茶褐色である。

椀（5）　口径は約12.3cmである。底部は欠損しているが，平底とみられる。口縁部は内彎ぎみに開き，端部がまっすぐに立ち上がるものである。口縁上端は内傾している。口縁端部外面は横ナデしているが，それより下は成形の際の指圧痕が残り，未調整である。粘土紐の痕跡も観察できる。胎土には砂粒を含むが，焼成は良好である。色調は茶褐色である。

皿（3）　口径は約12.5cmである。口縁部は外方に開き，端部でわずかに外反する。内・外面ともに横ナデで仕上げている。

鉢（7・9・11・13）　(11)は口径は約15.5cmである。短く外反した口縁部と胴の張らない体部からなっている。底部は欠損しているが丸底気味の平底であろう。口縁部外面のみ，横ナデしている。体部外面には幅約4.5cmの粘土紐の痕跡が残り，継目に親指大の粘土を貼りつけている。胎土は砂を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

(13)は口径は約16.7cmである。鉢(9)と同様の形態である。異なる点は，鉢(11)の口縁端部が薄く仕上げているのに対し，口縁端はまるくおわっている。口縁部内・外面のみ，横ナデしている。胎土に砂粒を含むが，焼成は良好である。色調は赤褐色である。

(7)は体部上半は欠損しているが，鉢(11)(13)と同様，短く外反する口縁部をもつ形態である。底部外面は，成形時の指押痕が残り凹凸している。体部内面下半は横方向の刷毛目で調整し，そのあと底部を篦削りしている。体部外面には，対称の位置に人面が墨描きされている。いずれも髭をもった男である。なお，復原にあたって，大阪府八尾市本町発見の人面土器を参照した。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で，色調は茶褐色である。

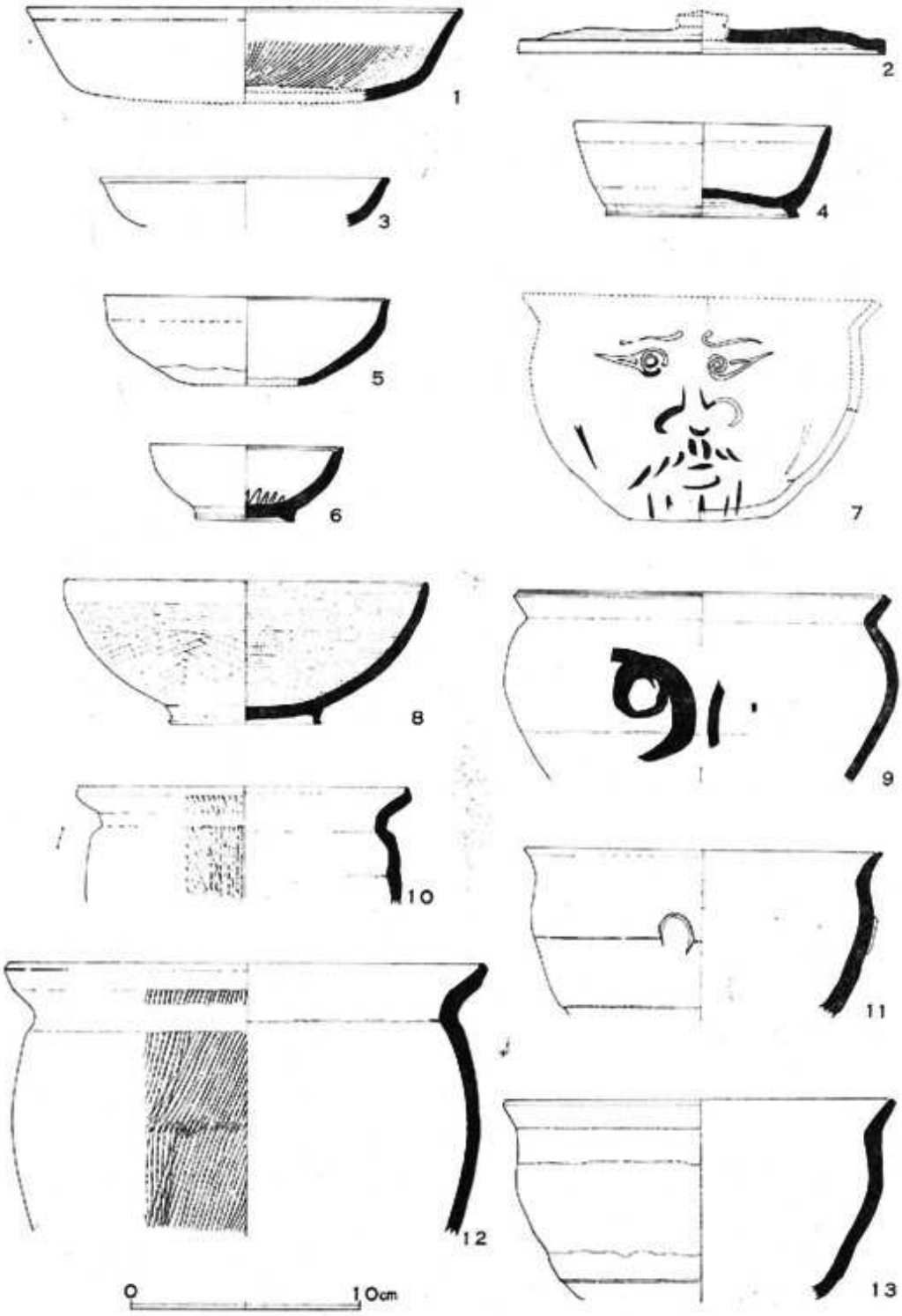


Fig. 13　出土土器実測図

(9)は口径は約15.8cmである。口縁上端は凹面を呈し外傾する。口縁部内・外面は横ナデで仕上げる。体部外面には左右に渦巻状の墨描きがあるが，破片のため全形は明らかでない。胎土は砂を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

甕（10・12）(12)は口径は約20.4cmである。短く外反する口縁部と弱の張りの少ない体部をもつものである。底部は欠損しているが，丸底であろう。口縁部及び体部外面は，刷毛目で調整し，頸部のみ横ナデで消している。胎土は砂粒を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

(10)は口径は約14.2cmである。口縁部は短く外反する。口縁端部は内傾している。口縁部・体部外面ともに縦方向の刷毛目で調整し，頸部は横ナデしている。内面は横ナデで仕上げている。外面全体に煤が付着している。胎土は多量の砂粒を含む。硬質で，色調は赤褐色である。

須恵器　器種には，杯・蓋・長頸壺・甕・鉢・高杯などがある。

杯（4）　口径は約11cm，高さ4.1cmである。内彎ぎみに外傾する口縁部と低い高台をもつものである。口縁部内外面ともにロクロで横ナデし，底部はナデツケで仕上げている。底部外面には篦切痕をとどめている。胎土は良質で，焼成も良好である。色調は暗灰色である。

蓋（2）　口径は約12.9cmである。口径に比べて，高さが低く扁平である。口縁部は短く屈曲し，端部断面は三角形をなす。つまみは欠損している。外面中央部は篦切り痕の上を粗く横ナデしているが，周縁部は丁寧にロクロで横ナデする。内面は中央部をナデツケし，周縁部を横ナデで仕上げている。胎土は少量の砂を含む。焼成は良好で暗灰色である。

瓦質土器

椀（6・8）(6)は口径は約8.3cm，高さ3.2cmである。内彎ぎみに開く口縁部と断面三角形の高台をもつ小型の土器である。口縁端部内面に沈線が一条めぐる。口縁部外面は横ナデする。口縁部内縁は横ナデし，底部内面には一定方向に篦磨きする。(8)は口径は15.7cm，高さ6.3cmである。内彎ぎみに開く口縁部と断面梯形の高台をもつものである。口縁部外面は横方向に篦磨きし，とくに口縁部は丁寧に調整している。口縁部内面は横方向にこまかく篦磨きし，底部内面に，一定方向に粗く篦磨している。内外面ともに黒灰色で，にぶい光沢をもっている。胎土は砂粒を含み中は灰白色である。焼成からすれば，瓦器ともみられるが，普通，瓦器は精製された粘土を用いるので，この土器を瓦器にするか，黒色土器にするか，なお，検討を要する。そのほか，「東」と墨書した須恵器杯片がある。

土師器・須恵器の多くは，奈良時代後半のものと考えられる。瓦質土器は平安時代のものである。土師器のうち注目されるのは鉢形土器である。14個体出土しているが，一様の形態をもち，成形・調整ともに類似点がある。この種の土器にかぎり，人面が墨描きされており，祭祀用に特別に製作され，用いられた可能性がある。

2. 土製品

土馬 (Fig. 14) 頭部と尾部が欠損している。体部は粘土板を折り曲げて作っている。したがって，横断面は逆V字形をなす。鞍や手綱はない。奈良時代中頃のものと思われる。

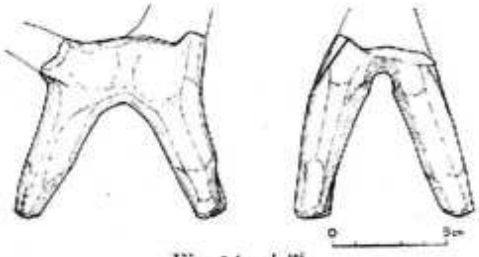


Fig. 14 土馬

土管 (Fig. 15) 全長24. 4cm，径11cmである。円筒形をなし，一方の端がふくらみ接合部を作り出している。径は13. 3cm となる。約3. 5cmの粘土紐の巻きあげによって作られている。内面の粘土紐の継ぎ痕跡から，接続部が最後に作り出されたことがわかる。外面は凹凸がある。両端部は横ナデ，体部は縦方向のナデツケで調整されている。内面は横ナデである。瓦質のもので，胎土には多量の砂を含み，灰色を呈す。この土管は，第二次調査Bトレンチから，5本以上連なって発見された。出土層位からみて，中世以降のものと思われる。

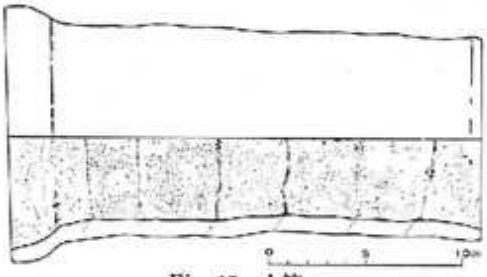


Fig. 15 土管

3. 金属製品

帯金具 (PL. 14-1，Fig. 16) 鉄製。長さ3cm，幅2. 5cm である。帯先につける鉈尾で，裏面には留釘3本を鋳出する。

釘 (PL. 14-2) 銅製。長さ7cm である。横断面は四角形で，頭部は折り曲げたもので扁平である。

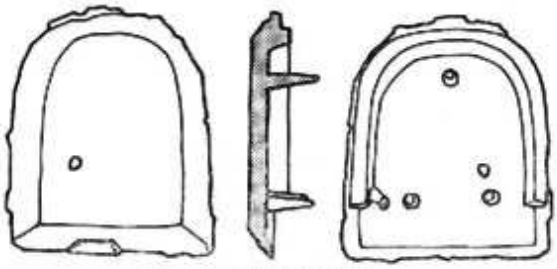


Fig. 16 帯金具（実大）

銭貨 (PL. 15) 和同開珎13枚，朱雀大路西側溝，同延長部，九条大路北側溝から出土している。その他宋銭・金銭・明銭などがある。

宋銭…淳化元宝 (990) 祥符通宝 (1008) 至和元宝 (1054) 嘉祐通宝 (1056) 熙寧元宝 (1068) 元符通宝 (1098) 大観通宝 (1107) 政和通宝 (1111) 金銭…正隆元宝 (1156) 1枚，明銭…永楽通宝 (1408) が3枚ある。

4. 木製品

曲物底板・曲物側板・漆器椀片・桶・棰・木簡などがある。棰・木簡以外はいずれも近世の遺物を含む土層中から出土した。木簡は1点あるが判読できない。

曲物 曲物側板には，器の径をあらかじめ印したと考えられる墨痕が残っており注意を引いた。この側板は，樺皮や底板を失っているうえ，埋没時に変形を受けているが，ほぼ全体を留め，原形を推定することはできる。檜の柾目材の薄板から作り，径13cm，現存高8.5cm，木釘穴は4個所ある。重ね合わせ部分は5.1cmあり，墨痕は，内側に入る側板の上面，側板端から5.1cmの位置にある。この位置に，外側に出る側板の木口を合せる。これは，要求された径の曲物が作り易いよう，側板を曲げる作業工程以前にあらかじめ側板数枚を重ねて一括印をつけたものであろう。このような墨痕は，通常仕上げ時や使用時に失なわれるものであるが，この例の如く残り，製作工程の一端を示す資料は少ない。

棰 (PL.16, Fig.17) 第二次発掘Aトレンチの朱雀大路に面する築地の内側の下層遺構面より出土したもので，全長263cm，中央部断面6.4cm×8.0cmありほぼ完形を保っている。

材種は檜で，表面はちょうなばつりの上やりがんなをかけたらしく，いたって平滑に仕上げられている。材の一端は棟の拝み部分にあたり，幅の約3分の1を造り出して柄とし，柄の中央に，対になる棰と固定するための栓穴がある。他端は木口鼻で，その切断面は木柄に直角ではなく下面からみてやや鋭角になっている。上面には木口から75cm後方に小舞をとめるための「えつり」の仕口があり，下面にはこれより10cm前方に桁のあたりとみられる一部分風蝕していないところがある。また木口部分には茅負を留める釘によっておきた剥れが入っている。

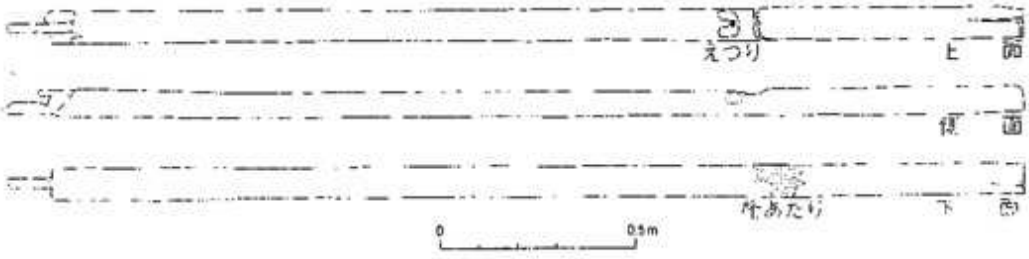


Fig.17 出土棰

このようにしてあきらかに奈良時代に属する化粧棰の様相を示し，その長さや太さ，桁の位置などから考えて築地に使われていた可能性が強い。その場合は発掘地点からみて朱雀大路に面する築地ということになる（P.32 参照）。

5. 瓦 類

瓦類は，第二次調査においては朱雀大路に面した西側築地跡周辺から，第三次調査においては朱雀大路西側溝から主として出土した。羅城門基壇付近からは，ほとんど発見されなかった。第二次調査では，2時期にわたる築地の，それぞれに伴って上下2層に明確にわかれて出土している。軒瓦は量的に少なく，軒丸瓦が10型式21点，軒平瓦が5型式9点である。二・三両次の瓦類について一括して以下に述べよう。軒瓦の型式番号については，奈良国立文化財研究所で用いている番号によった（註1）（本文中の番号は挿図中の番号をさす）。

軒丸瓦（PL. 11, Fig. 18～20）　1（6012A）は重圏文軒丸瓦である。小片であるが，外縁と圏線との間隔からみて平城宮跡や唐招提寺にみられる6012Aである。2（6133B）は内区に単弁12弁の蓮華文を配している。外区は内縁に広い間隔で珠文をめぐらせるが，外縁は素文である。瓦当面は全体的に平坦である。瓦当裏面の丸瓦との接合部には，接合用の粘土を押圧した際の，指頭による凹凸が顕著に認められる。類例は平城宮跡，西大寺，檜隈寺跡などで知られている。3（6284C）は，内区に界線でかこんだ複弁8弁蓮華文を配し，外区内縁に珠文，外縁に線鋸歯文をめぐらしている。1＋6の蓮子をおいた中房は，弁区とほぼ同一面上におかれ，蓮弁の反転もほとんどないために，全体に平坦な瓦当面になっている。瓦当裏面は横方向に調整している。瓦当裏面に丸瓦を接合する際にあてた粘土は，へらで円弧状に調整している。類例は平城宮跡，大安寺，額安寺などで発見されている。4（6285）は3と同様な瓦当文様をもつ軒丸瓦であるが，蓮弁はやや強く反転しており，弁区全体を外区内縁より一段高く作っている。中房は弁区より低くおかれている。瓦当面には，笵型木目の痕跡が横方向にあらわれている。類例は平城宮跡，恭仁宮跡，法隆寺，秋篠寺などで発見されている。6（6304L）は3・4と同様の文様構成をもつ大形の軒丸瓦である。瓦当直径は約30cmに復原できる。1＋6の蓮子をおく中房はやや凸出し，蓮弁はわずかに反転する。こうした大形の軒丸瓦は，他の型式のなかにも見受けられるが，量的に少ないことから特殊な用途，たとえば鬼瓦と同じように棟瓦として用いられた可能性が考えられる。類例は平城宮跡から出土している。5（6308Bb）は複弁8弁蓮華文で，蓮弁の反転度はかなり強く，各弁の間には間弁を配している。1＋6の蓮子をおいた中房はやや凸出している。瓦当は厚く作っており5.1cmある。瓦当側面には「北」の刻印が見られるが，平城宮跡出土のものの中にも多くこの刻印がみられる。なお，瓦当面には，笵型のひび割れを示す隆起線がみられる。7・8・9（6316）は，いずれも内区の主文として間弁のない隣接した複弁蓮華文を配しており，外縁は高く直立している。これらは，蓮子の数，中房の高まりなどがそれぞれ異なっているが，同一型式での微細な変化である。7（6316 1）は直立縁で外縁の立ちあがりは0.9cmある。1＋4の蓮子をもつ中房は凹である。丸瓦のとりつけは瓦当裏面の天から4分の1の位置にある。接合部には粘土をあつくあてている。8（6316B）も中房は凹であり，

1＋8の蓮子をおいている。丸瓦の接合部は7よりも若干上位にあり，裏面にあてる粘土は7ほど多くない。9（6316Da）の瓦当直径は7・8よりやや大きい。外縁は前二者と同様に高い直立縁であるが，文様の線が太く中房が突出しているために，さほど高い感じを与えない。丸瓦の接合部は，瓦当裏面の中位ちかくにあり，粘土をあつくあてている。7・8・9の類例は，平城宮跡，常陸，下野，甲斐，播磨，備後，讃岐の各国分寺跡（註2），播磨（註3）の溝口廃寺，上原田廃寺，小川廃寺，中井廃寺，西条廃寺及び備後（註4）の宮の前廃寺，本郷平廃寺，岡遺跡などに見られる。10（6316Db）は9と同一の瓦当文様であるが，中房においた蓮子が1＋8となっている。これは9の中房においた4点の蓮子の間にそれぞれ1点ずつ彫り加えたものである。こうした類例は元興寺，西隆寺跡（註5）で発見されている。

軒平瓦（PL. 12, Fig. 21）　1（6572）は右端部だけの小片であるが，外縁とともに2重圏線を囲わした重郭文軒平瓦である。顎は曲線顎である。類例は平城宮跡，難波宮跡，長岡宮跡，唐招提寺などで発見されている。2（6694）は，上外区から2葉ずつ分岐した中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を内区に配し，外区に珠文をめぐらせた瓦当文様をもつものである。顎は段顎である。類例は平城宮跡，唐招提寺，薬師寺などで発見されている。3（6721F）は，三葉形の中心飾の左右に5回反転の均整唐草文を内区に配し，上下外区に小さな珠文を密においている。脇区は素文である。顎は曲線顎である。類例は平城宮跡，海竜王寺，秋篠寺，法隆寺などから発見されている。4（6710Ab）は，山形の中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を内区に配し，外区に珠文を疎にめぐらせている。文様構成は平城宮跡出土の6710Aaとよく似ている。6710Aaとは，上下外区珠文帯の間に×文を配さない点が異なり，文様の線もかなり太く丁寧な彫刻ではないが，唐草文と珠文との位置関係からみて，今回出土したこの軒平瓦は6710Aaの笵型を彫り直し，×文を省いたものであることが明らかである。顎は両者ともに曲線顎である。平瓦の凹面に瓦当部ちかくを横方向に調整しているが，ほぼ全面に布目が明瞭に残っている。凸面は叩き目の痕跡がわからないほど，ほぼ全面にわたって丁寧にけずっているが，一部に縄叩目が残っている。瓦当面から7cmの位置に丹が付着している。側縁は葺き上げる際にかなり欠きおとしている。類例は備後（註4）の本郷平廃寺，吉田寺跡，岡遺跡から発見されている。5（6711）は中心飾も明確でなく，唐草文も左右均整に配されてはいないが，均整唐草文を意図して作られたものである。顎は曲線顎である。平瓦部の凹面は，瓦当寄りの約3分の1の範囲だけ厚くけずり，後部とさかいに明瞭な段が見られる。凸面は4と同様，丁寧にけずっている。葺き上げる際に凹面の側縁を欠いたものもみられ，いずれの凸面にも瓦当部ちかくに丹が付着している。

道具瓦（PL. 13-2, Fig. 22）　道具瓦としては面戸瓦がある。5点出土しており，幅23.5～25.9cm，高さ13.6～14.1cmのものである。

丸・平瓦（PL. 13-1・3, Fig. 22-2・3）　丸・平瓦は現在なお整理中であるが，第二次調査で発見した上層の瓦について，一部ではあるが整理を行なったのでその要点を述べよう。

丸瓦は灰白色で軟質の焼成のものと，灰黒色で硬質の焼成のものとがある。いずれも平均して全長36cm，幅14.5cm，玉縁長4～5cmである。凸面の縄叩き目は縦方向のケズリによる調整でほとんど消されている。玉縁部凹面の段はさほど明瞭でなく，なだらかである。平瓦も丸瓦と同様に灰白色で軟質なものと灰黒色で硬質のものとがある。全体的に小ぶりで薄手に作られている。全長は平均して34.3cmである。厚さは1.3～1.6cmのあいだに集中する。凸面にはいずれも縦方向の縄叩き目がほぼ全面に残っているが，広端と狭端に接した1～1.5cmの範囲は横方向のケズリが行なわれている。凹面には成形時の布目圧痕が明瞭に残っている。凹面のひと隅に，側辺にそって縁をまつった布の圧痕がみられるものがある。このことは，凹面に桶巻作りによる模骨痕がみられないことをあわせて，いわゆる1枚作り（註6）によったものと考える。

軒丸瓦		1	2	3	4	5	6	7	8	9・10
瓦当直径		(15.8)	16.5	(16)	(16.5)	16.2	(30.6)	13.7	14.4	16.9
瓦当厚		不明	3.6	4.3	4.1	5.3	(5)	3.4	3.9	4.7
内区	中房径		3.9	4	3.3	3.6	不明	3.2	3.4	5.1
	蓮子数		1+6	1+6	1+6	1+6	1+6	1+4	1+8	1+4 1+8
	弁数		T12	F 8	F 8	F 8	F 8	F 8	F 8	F 9
外区	内縁文様	J	S15	S24	(S23)	S16	(S24)	S16	S24	S17
	外縁文様			(LV16)	(LV22)	LV16	不明	LV20	LV27	
全長						(37.7)				
出土個体数	2次	1				1		1	5	1・1
	3次		1	4	1		1			1

軒平瓦		1	2	3	4	5
上弦幅			(23.5)	(28.5)	不明	26.7
下弦幅			(27.5)	(29.5)	不明	25.7
厚			6.0	5.6	5.7	5.2
内区文様		J	KK	KK	KK	KK
上外区文様			S15	S33	S13	S20
下外区文様			S16	S34	S13	S18
脇区文様			S 2		S 2	S 3
全長					35.4	39.7
出土個体数	2次	1	1		1	4
	3次		1	1		

Tab. 1　軒瓦計測値・出土個体数表（型式不明分を除く）

註1．軒瓦解説の各番号の次にカッコ内に記した数字はこの型式番号であり，アルファベットは細分された型式である。なお，平城宮跡出土の同笵瓦については「平城宮発掘調査報告Ⅱ～Ⅳ」（奈良国立文化財研究所学報15～17）を参照されたい。

2．角田文衛編『国分寺の研究』昭和13年8月。

3．鎌谷木三次『播磨上代寺院址の研究』昭和17年3月。

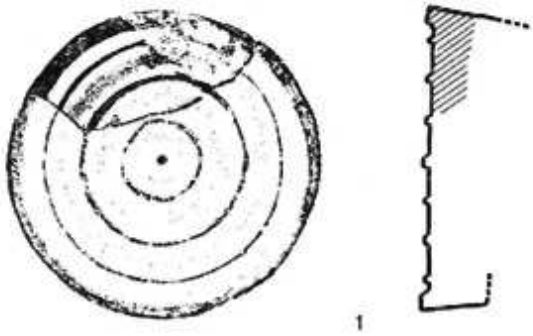
4．広島県教育委員会『備後工業整備特別地域埋蔵文化財調査概報』昭和42年3月。

同『伝吉田寺跡発掘調査概報』昭和43年3月。

広島県岡遺跡発掘調査団『岡遺跡発掘調査報告書』昭和47年3月。同書にあげられた一覧表によれば，なおいくつかの遺跡から発見されている。

5．奈良県教育委員会『西隆寺金堂跡発掘調査概報』昭和47年3月。

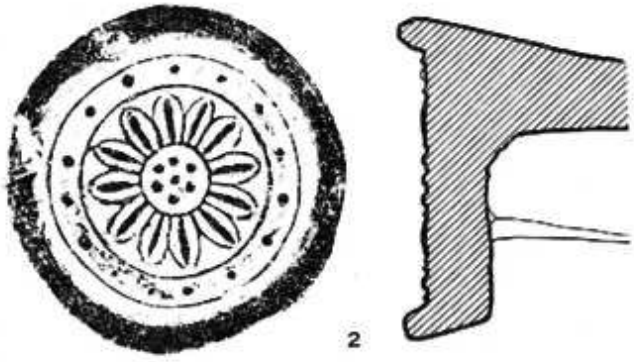
6．佐原真「平瓦筒巻作り」『考古学雑誌第58巻第2号』，昭和47年9月。



1

1. 重圏文（6012A）

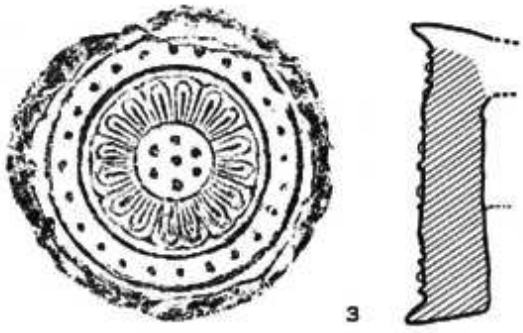
瓦当一復原径15.8cm・厚不明，三重圏文，外縁幅0.8cm・高0.4cm，灰白色，胎土緻密。



2

2. 単弁12弁蓮華文（6133B）

瓦当一径16.5cm・厚3.6cm，内区一中房径3.9cm・蓮子1＋6・弁区幅3.1cm，外区一内縁幅1.5cm・珠文15・外縁幅2cm・高1.1cm，灰色，胎土細い砂含む，丸瓦部裏面一布痕あり。

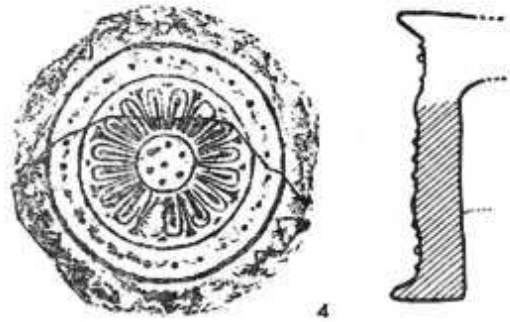


3

3. 複弁8弁蓮華文（6284C）

瓦当一径16.0cm・厚4.2cm，内区一中房径4.0cm・蓮子1＋6・弁区幅2.8cm，外区一内縁幅1.7cm・珠文24・外縁幅1.7cm・線鋸歯文16，灰黒色，胎土砂粒含む，瓦当側面一横ナデ。

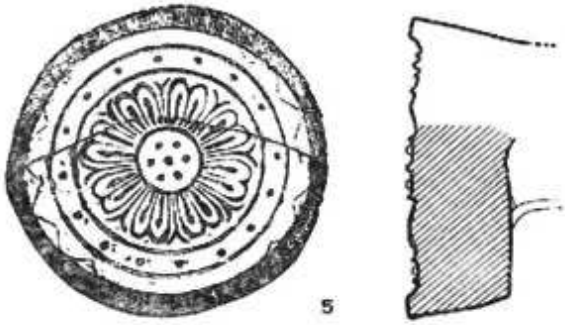
Fig. 18　軒丸瓦



4

4.　複弁８蓮華文（6285）

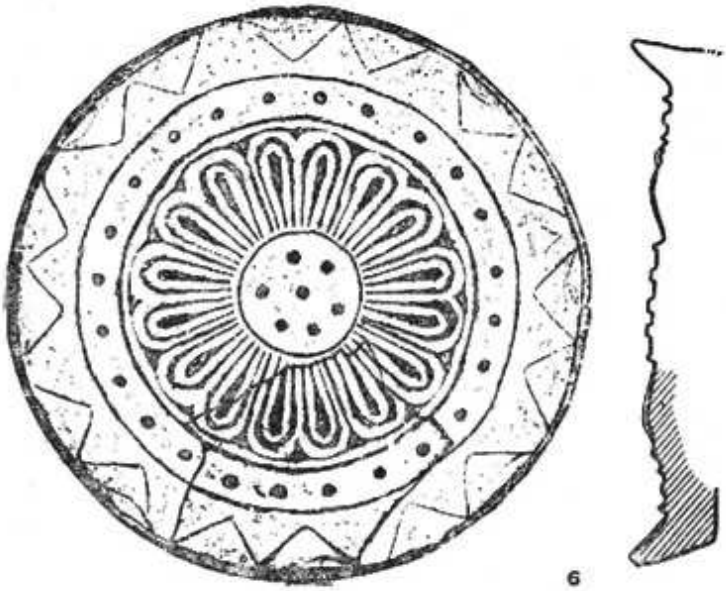
瓦当―復原径16.5cm・厚4.1cm　内区―中房径3.3cm・蓮子１＋６・弁区幅3.1cm，外区―内縁幅1.7cm・珠文23・線鋸歯文22，灰色，胎土小石・砂含む，瓦当面に笵の木目が残る。



5

5.　複弁８弁蓮華文（6308Bb）

瓦当―径16.2cm・厚5.3cm，内区―中房径3.6cm・蓮子１＋６・弁区幅3.2cm，外区―内縁幅1.3cm・珠文16・外縁幅2.2cm・高0.6cm・線鋸歯文16，灰色，胎土緻密，瓦当側面に「北」の刻印あり。

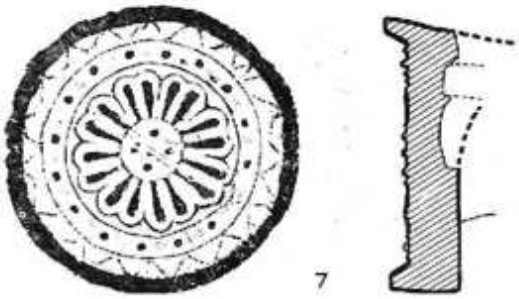


6

6.　複弁８弁蓮華文
（6304L）

瓦当―復原径30cm・厚5cm，内区―中房・蓮子とも不明，外区―内縁幅2.4cm・高2.4cm・線鋸歯文，黒灰色，胎土砂粒含む。

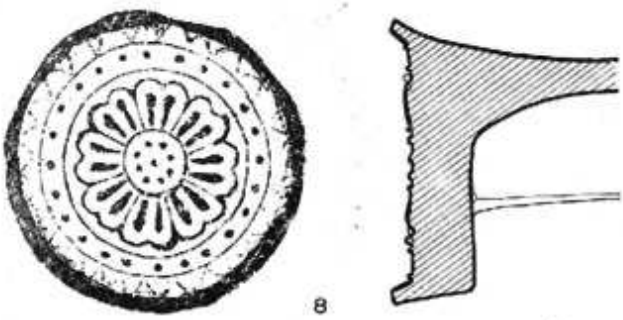
Fig. 19　軒丸瓦



7

7.　複弁８弁蓮華文（6316Ⅰ）

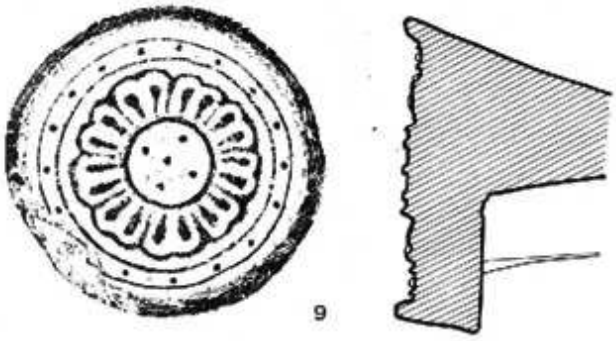
瓦当・径13.7cm，厚3.4cm，内区一中房径3.2cm・蓮子１＋４・弁区幅2.8cm，外区一内縁幅1.1cm・珠文16・外縁幅1.2cm・高0.9cm・線鋸歯文20，灰色，胎土良質



8

8.　複弁８弁蓮華文（6316B）

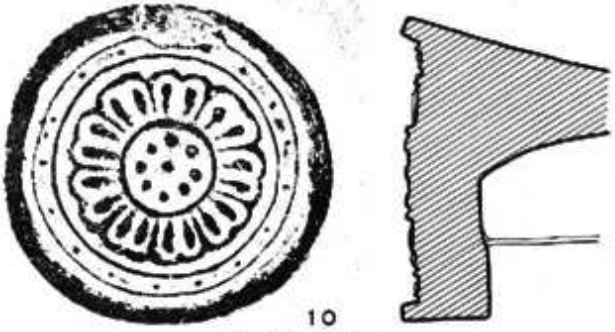
瓦当一径14.4cm・厚3.9cm，内区一中房径3.4cm・蓮子１＋８・弁区幅3.2cm，外区一内縁幅1.31cm・珠文24・外縁幅1.3cm・高1.1cm・線鋸歯文27，灰色，胎土良質，丸瓦部表面一縦方向のヘラ削り調整。



9

9.　複弁８弁蓮華文（6316Da）

瓦当一径16.0cm・厚4.7cm，内区一中房径5.1cm・蓮子１＋４・弁区幅2.7cm，外区一内縁幅1.0cm・珠文17・外縁幅1.5cm・高0.9cm・素文，灰色，胎土砂粒多く含む。

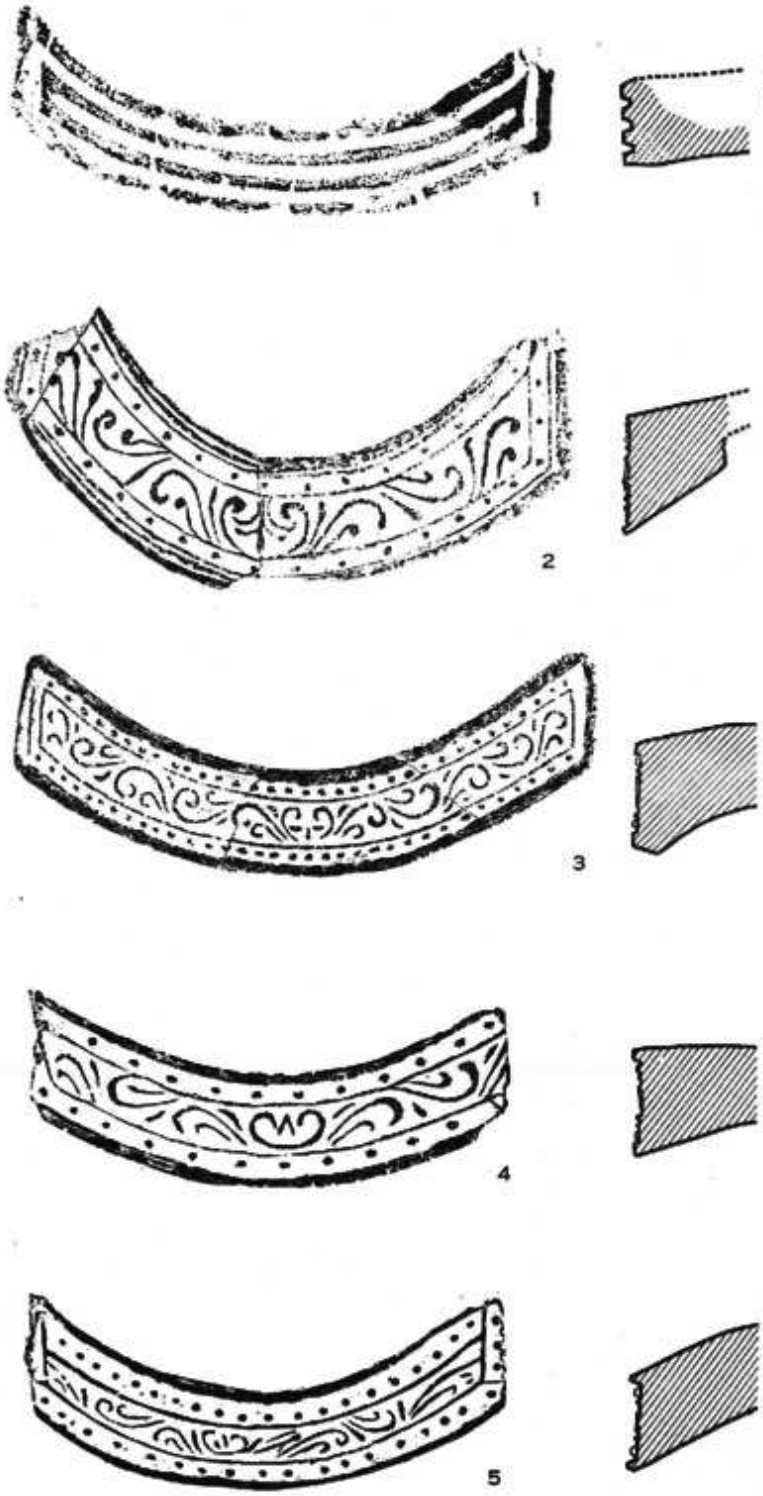


10

10.　複弁８弁蓮花文（6316Db）

瓦当一径16.0cm・厚4.7cm，内区一中房径5.1cm・蓮子１＋８・弁区幅3.2cm，外区一内縁幅1.0cm・珠文17・外縁幅1.2cm・高1.1cm・素文，灰黒色，胎土良質，丸瓦部内面一ヘラ削り。

Fig. 20　軒丸瓦



1. 重郭文 (6572)

瓦当厚4.7cm，曲線顎，灰黒色，胎土緻密。

2. 均整唐草文 (6694)

瓦当厚6.8cm，段顎一深5.0cm・高1.1cm，珠文一上外区15・下外区16・脇区2，黒灰色，胎土小石含。

3. 均整唐草文 (6721F)

瓦当厚5.6cm，曲線顎，珠文一上外区33・下外区34，灰色，胎土小石含む。

4. 均整唐草文 (6710Ab)

瓦当厚5.7cm，曲線顎，珠文一上外区13・下外区13・脇区2，全長35.4cm，凹面縦方向のヘラ削り，布痕あり，黒灰色，胎土良質。

5. 均整唐草文 (6711)

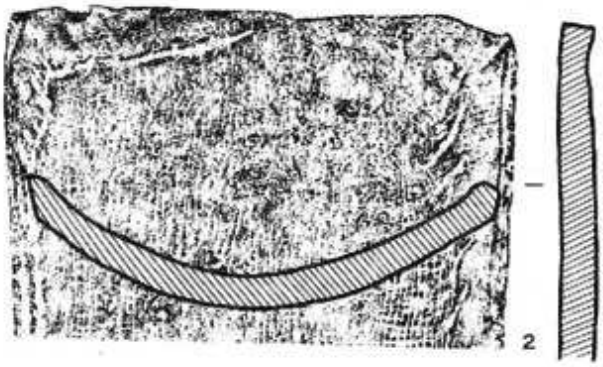
瓦当厚52cm，曲線顎，弦幅26.7cm・下弦幅25.7cm，珠文一上外区20・下外区18・脇区3，全長39.7cm，灰黒色，胎土緻密。

Fig. 21　軒平瓦

1

1.　面戸瓦

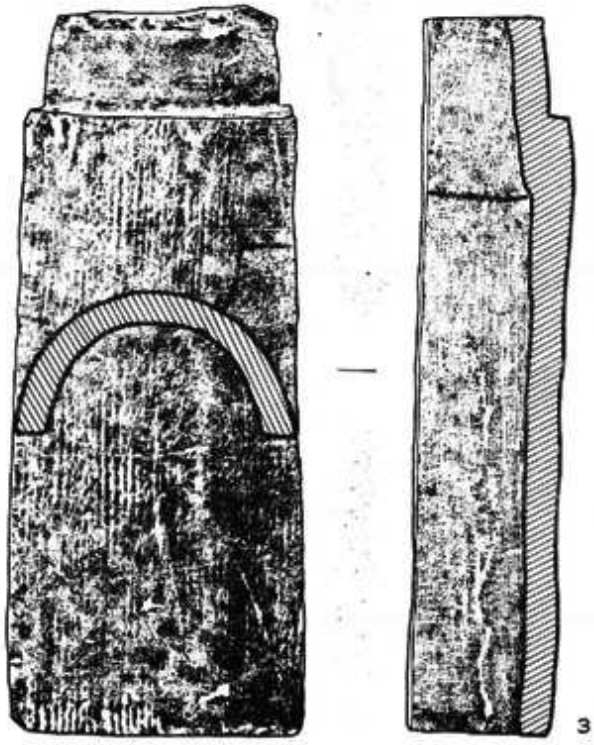
幅25.7cm・高136cm・厚1.6cm，凹面糸切り痕，凸面縦方向の刷毛目，灰色胎土砂粒含む。



2

2.　平瓦

全長35.4cm・広端幅27.8cm・狭端幅22.4cm・厚1.6cm，凸面一縦方向の縄叩き，凹面一布目圧痕，1枚作り，灰白色，胎土砂含む。



3

3.　丸瓦

全長36.7cm・幅14.1cm・厚1.7cm・玉縁長4.7cm，凸面下縦方向縄叩き，凹面布目痕，黒灰色，胎土砂小石含む。

Fig. 22　道具瓦，丸・平瓦

6. 大和郡山城天主台使用の旧礎石 (PL. 9・10 Fig. 23)

郡山城は，近世は柳沢の居城として名高い。築城は，天正年間にさかのぼり，豊臣秀長，増田長盛と城主をかえながら20年かかって完成をみたといわれている。秀長百万石の時，本格的な築城がなされ，国中の石が集められている。それでも石が不足し，寺院の礎石・庭石・五輪塔・燈籠・石地蔵まで持ち出して，石垣に使用している。現在，こうした石造物が，石垣中に散見できる。このうち礎石は約50個ほどあるという。天主台の石垣には羅城門の礎石と伝えられるものを含めて14個ほどあり，ほかに基壇の化粧石がある。石材は凝灰岩 (Fig. 23—3・6・8・9・10) と花崗岩製 (Fig. 23—1・2・4・5・7) のものとがある。これらの礎石が伝承通り羅城門のものかどうか確定はできないが，あきらかに奈良時代のものと認められるものがあり，今回調査した分を一応紹介しておく。

礎石 (1・2・5) は，中心に円形の出枘をもつ円形の柱座をつくりだしたものである。(1) は柱座径100cm，柱座高8cm，出枘径30cm，出枘高5cmである。(2) は柱座径83cm，柱座高7cm，出枘径21cm，出枘高2cmである (PL. 10—2・4)。(5) は柱座径72cm，柱座高7cmである。(5) の出枘は踏み石とされていたため，表面が磨滅し，円形柱座の中央部がわずかに高くなって残っているだけである (PL. 10—1・3)。

(3・4・6) は円形の柱座をつくりだしたものである。(3・6) は直方体に切りだした石材の一面に柱座の仕口とみられる掘りこみが2か所ある。(3) は112cm×100cm×70cmで，柱座は径80cm，高さ3cmである (PL. 9—2・4)。(6) は120cm×96cm×74cmで，柱座は径88cm，高さ7.5cmである (PL. 9—2・6)。(4) は柱座をつくりだした面以外は割り面のままである。柱座は径102cm，高さ6.5cmである (PL. 10—6)。

(7・8) は柱座の二方に地覆座がある。(7) は柱座のある面以外は野面のままである。柱座は径70cm以上，高さ2.5cm，地覆座の幅は25cmである (PL. 10—1・5)。(8) は92cm×58cm×56cmの直方体で円形の柱座の半分と地覆座を一面につくりだしており，二個の石で一対となるものの片割れであろう。柱座は推定径75cm，高さ3cm，地覆座の幅は26cmである。

磨臼敷 (10) 100cm×70cm×52cmの直方体の石の一面に径15cm，深さ3cmの軸摺り孔と方立の穴がある。方立の部分は石碑の台座にした時，大部分を打ち欠かれている (PL. 9—5)。

基壇化粧石 (9) 116cm×61cm×28cmの直方体の石材の長辺の一辺に仕口がある。葛石とみられる (PL. 9—1)。

(1・2・4・9) は天主台石垣の東面に，(3・6) は天主台石垣の東北の稜線の裾に，(5・7) は天主台登り口の東南に，(8) は天主台西南方約50mの石垣上端に，(10) は天主台上の石碑の台座となっている。(3・6) とここに紹介できなかった他の一個を加えて三個は天主台東北隅の石垣の裾にあるが，伝承では羅城門の礎石といわれている。

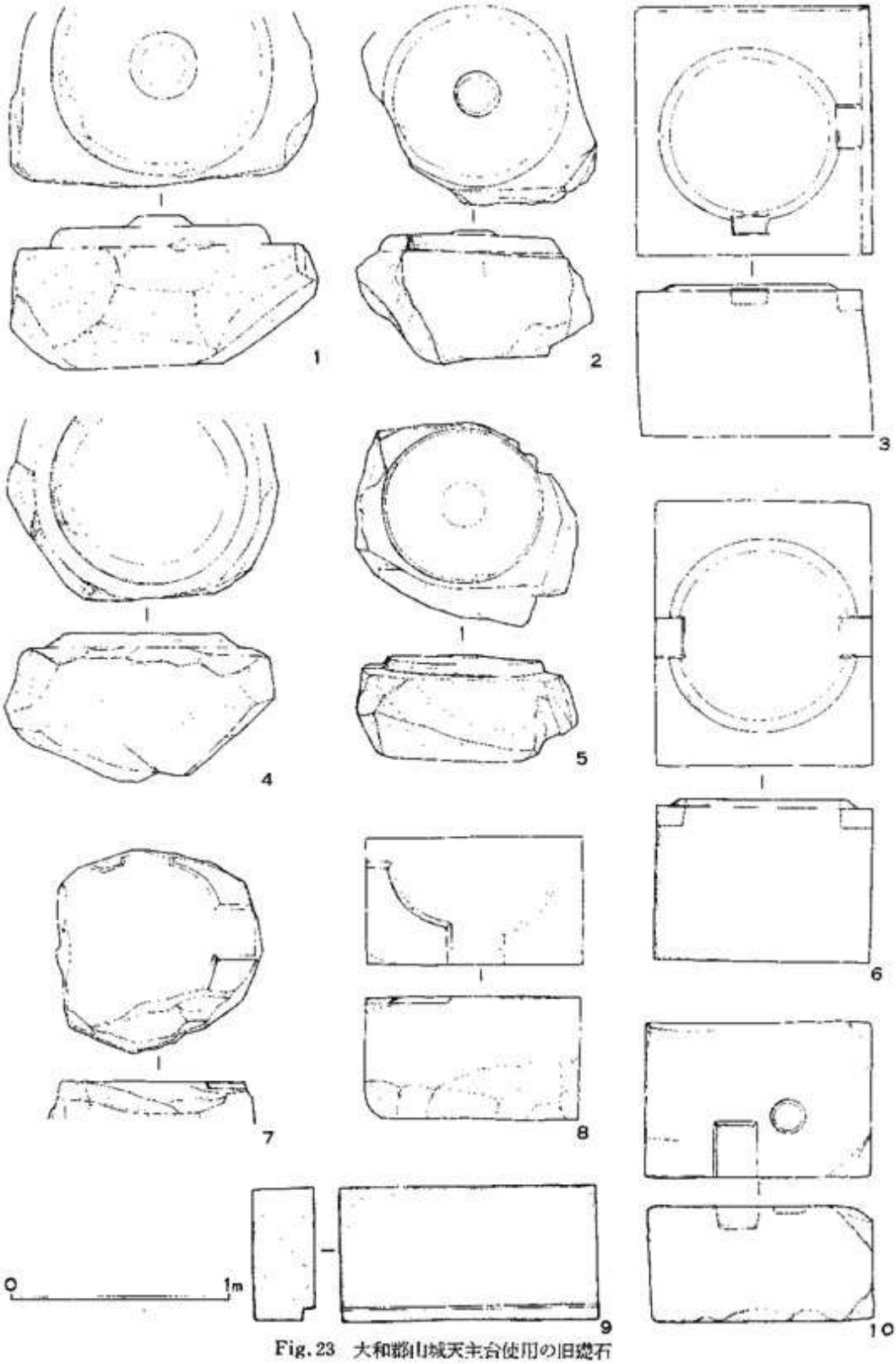


Fig. 23　大和郡山城天主台使用の旧礎石

V 考　　察

1. 羅城門の復原

三次にわたる発掘調査の結果より羅城門の平面寸法および朱雀・九条両大路の位置関係を復原してみたい。いま，第二次調査Aトレンチで検出した朱雀大路西側築地心より，想定朱雀大路幅28丈（註1）（83.20m）を東へとると1000分の1地形図の註釈より得られる朱雀大路幅によく合致することを知る（註2）。

さらに，幅員の2分の1（41.60m）をとり，朱雀大路の中軸線を仮定すると，これより第三次調査で検出した門基壇の掘こみ地形の西端までは16.37mとなり，同じ寸法を東におりかえすことによって羅城門基壇東西幅32.74mが想定できる。こうして得られた羅城門位置での朱雀大路中軸心と，さきの平城宮内の発掘で確認されている朱雀門中心とを結ぶと，朱雀大路の南北軸線は南北距離3778mに対して国土座標系との振れが，南で東に14m，角度にして0° 12′ 40″ 振れる結果となる。

平城宮内の造営方位は同方向に8′弱の振れがあることがすでに確められているが，上記のことより京の南北方位はこれよりさらに4′強振れの大きい事が確認できる。

また，九条大路については，同じく第二次調査により検出された九条大路北側築地心より，Ⅱ-Dトレンチに検出された京南面外濠北岸までの距離は，ほぼ23mをはかり，濠での侵蝕を考慮すると推定大路幅8丈に近い値になる。したがって門より西へ200m余をへだつⅡ-Dトレンチのところでは，大路幅を8丈と仮定すると塀地を伴う築地の余地をとることができない。あるいは羅城門にとりつく築地塀（南面の羅城）は，門の両側100mくらいしかなくこのほかは京外から10丈ほどの外濠をへだてて直接大路があったのではなかろうか。

さらにこの外濠の北岸延長線から門基壇南北心まで，南へ18.4mをはかり，先きの23mとを合わせるとほぼ14丈という数値が得られる。このことは九条大路が門周辺では南に広がりその幅が14丈あったことになる。ちなみにこの14丈は朱雀大路幅員の2分の1に相当する。

次いで門の南北幅であるが，第三次調査で検出された門基壇の掘こみ地形北端と，門にとりつく築地（羅城）の寄柱と思われる対になった柱掘り形の中心までの距離は11.70mあり，これを南へ折りかえして，基壇南北幅を23.40mとすると南辺は第二次調査のⅡ-Bトレンチ北側にある地形の下りからほぼ1.4mさらに南寄りにあたる。

こうしてできた門基壇の大きさより門の柱位置を復原すると，桁行方向については，5間を想定し，17尺等間とみ，側柱からの基壇の出を13尺とすると111尺（32.90m）となり，先の32.74mと大差ない。ただ梁行方向については2間とし，17尺等間をとると，基壇の出13尺を加えても60尺（17.82m）となり，先の結果23.40mには足りない。あるいは梁行が2間ではなく，法隆寺西院中門，飛鳥寺中門に見られる様に梁行が3間となるであろうか。その

場合を想定すると一応，Fig.24のような柱間寸法が考えられるが，この梁行3間の平面は先にあげた2例にとどまり奈良時代には類を見ないきわめて特殊な例であり，なお疑問が残る。これを考慮して，第二次調査Ⅱ-Bトレンチの遺構を見ると，第三次の掘こみに比して地形の下りは不確かであり，しかも遺構面が第二次より1m程低位置にあることなど，これを門基壇南限としにくい。これによりFig.25のような梁行を2間とした復原寸法が考えられる。

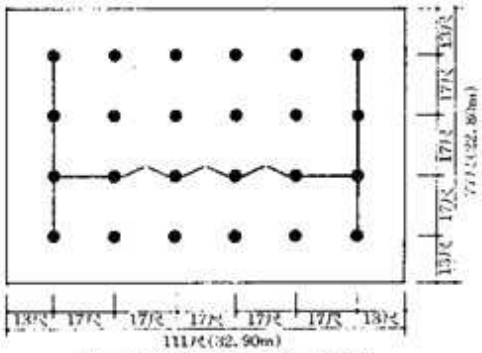


Fig.24 羅城門推定寸法 その1

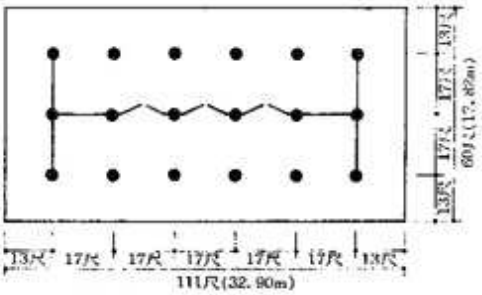


Fig.25 羅城門推定寸法 その2

この平面では，門の南北心は梁行3間の復原よりおおよそ4.6m北へ寄る。ただし築地は棟心にはこない。しかしこの梁行の寸法については基壇の4辺が確認されていない現状での推定にすぎないから，結論は今後の調査をまたずしてはつけ難いが，どちらかといえば後者と考える方が妥当ではあるまいか。なお立面については，資料を欠き不明であるが，側柱より基壇の出13尺が考えられる事や，付近より瓦が出土する事などより，三手先の組物を持つ重層入母屋造り瓦葺きであったと思われる。

つぎに門にとりつく羅城であるが，今回の一連の調査ではその遺構の明確な存在を確認できなかった。しかし第二次調査区西側で検出した朱雀大路西側溝延長部の護岸石や暗渠の掘り形の存在から，状況的に東西方向の羅城の存在が推定される。羅城が築地か土塁状のものであったかはなお不明である。

註1．「平城宮跡発掘調査報告書Ⅱ」（奈良国立文化財研究所学報15）昭和37年5月。
工藤圭章「世界考古学大系Ⅳ」昭和36年7月。
沢村仁「昭和16年日本建築学会講演梗概」

2．国土座標系上の東，なお国土座標系とこの地点で真北との振れは0°6′45″なのでほとんど無視出来る。

2. 出土棰による築地の復原

第二次の発掘によって出土した棰をもとに，当時の築地を復原してみよう。

今この棰からわかることは，1．棰勾配は$\frac{5}{10}$である。2．桁は水平距離で棟心より150cmの位置にある。3．茅負の出は棟心より215cmある。4．棰拝みは幅3分の1ほどの枘を造り出し反対流れの棰と組合せて栓でとめる。5．茅負は棰に釘留めとし，棰鼻の出は3cmほどで，その木口は投勾配$\frac{3}{10}$で切る。6．棟木や桁との接合には釘は使わない。などであり，遺構からは，1．屋根は瓦葺である。2．築地は4m幅の上にのる。3．朱雀大路側に4mの壇地をとりさらに幅4m，深さ1mの溝があり，それをわたって路面となる。

これらのことから屋根部分についてはかなり正確に復原できる。ただ問題となるのは今まで考えていたものより桁の出が多いのが目立つことである。比較する例として長治元（1104）年の「東大寺修理材木注進状」「同実検注進状」がある（註）。これによると当寺西大門の南面大垣は，棰長9尺で出土棰とほぼ同じ長さをもちかなり大きな屋根であったことがわかるが，桁位置は心心7尺位におさまり今回の出土棰より3尺狭い。

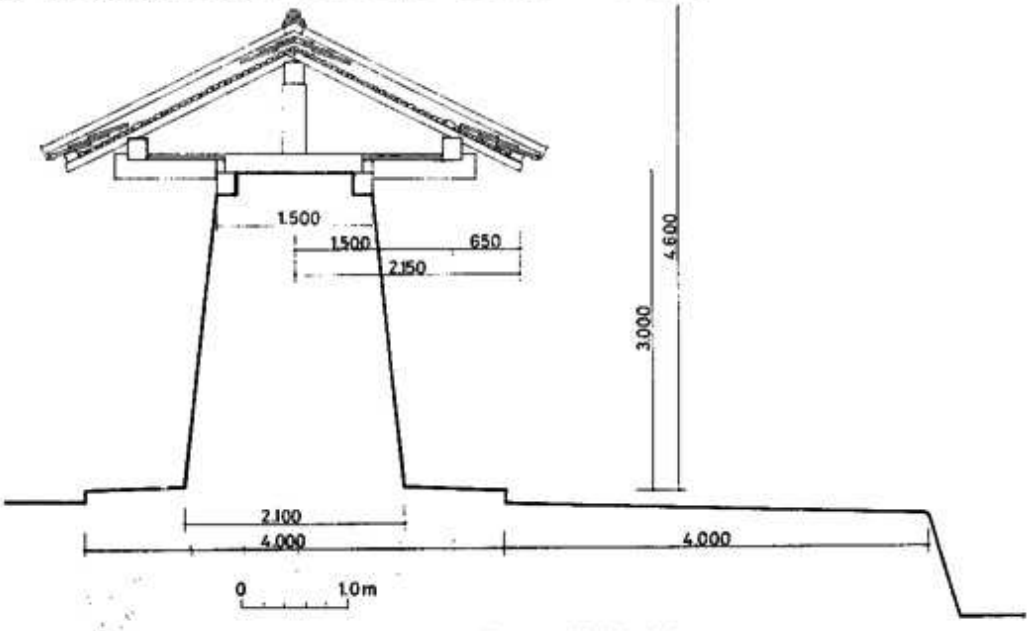


Fig. 26　出土棰による築地復原図

一方築地本体については遺構・遺物から決定することはできない。前出の東大寺では高さ10尺，基底幅7.5尺と推定され，また薬師寺・大安寺の南大門にとりつく築地は，発掘結果から基底幅7尺であったことがわかるから，これらにならい基底幅7尺・高さ10尺としたのが（Fig.26）である。これでみるとやはり屋根の大きいのが異様で，形だけからすると築地本体はもう少し大きく，基底幅8尺，高さ12尺ほどとみる方が良いのかも知れない。

註．「平城宮発掘調査報告Ⅲ」（奈良国立文化財研究所学報第16）（1963）に復原図をあげている。

3. 羅城門跡付近の瓦について

二次にわたる調査で出土した軒瓦の点数は，軒丸瓦21点，軒平瓦９点という限られたものであるが，この地域での軒瓦の組み合わせを考えてみよう。軒丸瓦では6316の１群が，軒平瓦では6711が数量的にややきわだっているので，一応この２型式の組み合わせを考えることができよう。6316がこの6711と組み合うことは，出土点数からはその可能性が一応考えられても，全体的に少量であるので文様構成の面からみてみよう。

6316は整った複弁蓮華文を内区に配しているのに対して，6711は中心飾も不明確な，そして左右不整一な均整唐草文を内区に配している。文様構成のうえからは不相応な組み合わせという感が拭いきれない。6316のうちDbはDaの中房の蓮子を彫り加えていること，6710 Abは6710 Aaの笵型を彫り直して用いていることについてはすでに述べたことであるが，本来の瓦当笵型に手を加えているという特徴が軒丸瓦，軒平瓦の両者に認められることは，この両型式に共通した特徴と考えて良いだろう。そして6316の１群は，文様構成の近似性から同一時期のものとすることができるので，本来的には6316と6710がひと組みの軒瓦として用いられていたものと考えられよう。備後国のいくつかの寺院跡から，この両型式の類例が多く見られることもこうした考えかたを補うものといえよう。

さて，今回報告した軒瓦は出土点数に比べて型式数が多かった。これらの年代について概観してみよう。6284Cは，平城宮跡において宮の造営当初に設けられ，あまり時を経ずして埋められた溝から「和銅」の年紀をもつ木簡に共存して出土しており，その年代の上限が明らかになっている（註１）。この6284Cにつづくものとしては，瓦当文様の構成上から6285や6304Lなどがあげられよう。6308Bは，これと同系統の文様構成をもつ軒丸瓦6311が平城宮跡において少なくとも「天平」初年にまでさかのぼることが明らかにされている（註２）。この両者は，瓦当裏面の調整法もよく似ており，6308が6311とほぼ同年代に作られた可能性が認められる。6133Bはこれと組み合う軒平瓦が，東大寺西塔跡の発掘調査によって天平勝宝年間にはすでに使用されていたことが明らかになった（註３）ので，6133Bについてもこれに近い年代を考えてよい。6012A・6572は，文様構成上から，また難波宮跡での調査によってこうした組み合わせが明らかになっている。この型式の軒瓦は，唐招提寺講堂の地下調査によって，講堂造営以前に存在したことが明らかになっており（註４），天平宝字３（759）年以前にすでに製作されているこ

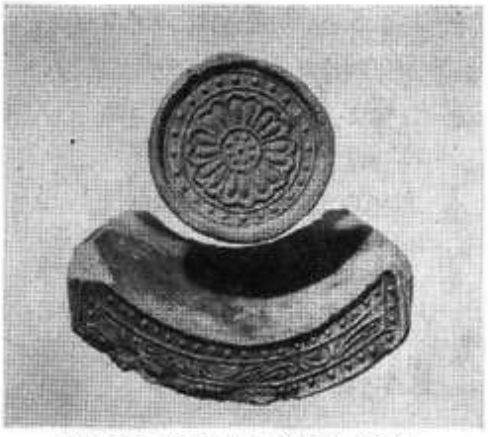


Fig. 27　軒瓦組合せ（6316・6711）

とが認められる。6316は，類例が数か国の国分寺跡に見られ，きわめて特徴的な軒丸瓦である。全体的に小ぶりで，外縁が高く作られ，内区の蓮弁が間弁をもたない複弁であることなどから，年代的に下る様相を具えているかのようである。しかし，外縁には線鋸歯文がめぐっており，奈良時代末期に多くある素縁のものとは異なった特徴，すなわち年代的にさほど下らない特徴と見ることができる。また，播磨国や備後国において国分寺以外の数か寺でこの種の軒瓦が用いられているのは，奈良時代のある時期に多く用いられた文様構成と考えてよいだろう。こうした傾向は，平城宮朝堂院地区で多用された6225・6663のひと組の類似型式が数か国の国分寺に用いられ，さらに美作，備前，備中の各国において国分寺以外の多くの寺院で用いられたことによく似た状況といえよう。また，管見にふれた限りでは6316類似型式が出土する畿外の国々からは6225類似型式が発見されず，また逆に6225類似型式の見られる畿外の国々からは6316類似型式が認められないということも，この6316が年代的にあまり下らないものとする手がかりとなろう。実年代としてはやはり，国分寺造営の時期を考えねばならず，これらの型式が西国に集中してみられることから，東大寺造営におけるひとつの区切りである750年代をめやすとして考えておきたい。6710もさきに述べた組み合わせ関係の考えから6316と同じ時期の軒平瓦と考えてよいだろう。6711は瓦当文様がきわめて変則的なものであり，奈良時代の瓦とするのに躊躇するほどである。しかし，これは第二次調査の際に他の軒瓦とともに下層から出土したものである。上層からは軒瓦の出土をみなかったが，多量に出土した丸・平瓦は明らかに奈良時代の瓦である。したがって，6711についても下層から出土した他の軒瓦と同様，奈良時代のものと考えてさしつかえないだろう。

さて，たびたびふれてきたように，軒瓦のうち一部を除いては平城宮との同笵瓦が用いられていたことがあきらかになった。このことは，羅城門の性格を考えた場合，官の造営になるということから当然のことかもしれない。また，6316Db や 6710Ab が元興寺や西隆寺で用いられているが，これらの官によって行なわれたいくつかの造営工事において同一のものが用いられたということは，単に平城宮との同笵瓦が用いられたということだけでなく，平城宮所用瓦当笵型の一部を彫り加え，あるいは全面的に彫り直して用いているという意味において，官による造瓦事業を考えるうえで注目すべきことがらである。

註1．「奈良国立文化財研究所要項」『奈良国立文化財研究所年報1968』昭和43年12月。

2．「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1965』昭和40年11月。藤井功「平城だより―出土の瓦について」『大和文化研究13―3』昭和41年3月。

3．奈良県教育委員会「東大寺西塔院の緊急調査」『奈良県文化財調査報告書8』昭和40年3月。

4．沢村仁「瓦」『奈良大大寺大観―唐招提寺』昭和44年2月。

4. 文献にみえる羅城門

平城京の羅城門跡が来生橋のあたりにあるということは古くから言われていた。たとえば『大和志』には，

在郡山東，耆耕に田者見二其礎石一。

とあり，また，『大和名所図会』などもこの遺跡に注目している。江戸時代末，北浦定政は，平城京研究に志し，その著『大和国班田坪割略図解』に，

野垣村ト下三橋村トノ堺ニ今ライセ墓ライセ川トヨフ地名アリ，コハ羅城ノ北ニテ羅城門ノ跡ナリトイヘリ。則チ門外村ヨリ此所マテハ朱雀大路ノ跡ナリ。

と述べている。

この北浦定政の考え方は，日本都城制研究のなかで，基本的には関野貞，喜田貞吉らをはじめ，田村吉永，大井重二郎，福山敏男，大岡実らに継承されていった。とりわけ羅城門に関していえば，喜田貞吉は，『続日本紀』天平19年6月15日，羅城門に雨乞すとある記事から，羅城の存在をも推定し，大宝令にいう「京城垣」を羅城と解した（『帝都』1939．8）。

一方，田村吉永は，羅城門は存在したけれども羅城の存否は明らかでないとした（『平城京』『奈良叢記』所収，1942．1）。

また，岸熊吉『日本門牆史話』は，諸門の機能を中心に述べ，文献をはじめ絵巻物などにみえる門を集大成したすぐれた業績である。

これらの成果は，『郡山市史』（1966．7）にもとり入れられている。すなわち，郡山城天守台北側の左京掘の北岸上の道路は，東進して来生橋に至り，さらに東に続いて，平城京時代の南京極路である。これと下ツ道の交わるところに羅城門があったと推定し，現在ライセイ橋の北川底に門跡の礎石が残っていると述べている（同書15～16頁）。

このような研究業績のうえに，考古・歴史など関係諸学問の共同作業の結果，平城京における羅城門，羅城の存否も，都城制研究のなかでしだいにあきらかにされてきた。

1962年に公刊された『世界考古学大系4』のなかでは，条坊制に言及し，「平城京でも地形上，羅城門の東西に各一坊ほど，羅城の痕跡がみられる」ことを指摘している（同書15頁）。これは考古学に航空写真，1/1000地形図を応用し，平城京条坊を遺存地割によって確認するという作業結果から導かれたものである。

この考え方をうけついで，『日本建築史図集』（1963．5）は，羅城門付近の航空写真をかかげ，その地形からみて，羅城門を南に突出させて推定し図示している（同書26～28頁）。

先年，奈良市の委託をうけて，平城京保存調査会（会長故樋本亀次郎氏）が実施した「遺存地割による平城京の復原的調査研究（岸俊男京大教授班）」によっても，羅城門推定付近の地割は南にひろがる扇形状のものであることが確認され，これが羅城門の遺構と関連のあることが注目されていた。

また，滝川政次郎は，法制史の立場から，これまでの研究史を総括し，都城制における羅城門，羅城の意義を把握しようと試みた（「羅城門を中心とした我が国都城制の研究」『法制史論叢第二冊』所収，1967．6）。

もちろん，北浦定政以来，喜田貞吉，関野貞らの研究から，最近にいたる都城制の研究のなかでは，とりわけ平城京条坊に占める羅城門の位置は定説化し，発掘調査が十分行なわれれば，おそらく，その位置，規模なども判明するだろうとは期待されていた。すでに，1935（昭和10）年，佐保川来生橋改修のときには，右岸近くの川底から礎石が発見されており，発掘調査にはおおきな期待がよせられていたのである。

今回の発掘調査は，上述の経過を経て，1969年，奈良市が佐保川の東側で，1970年，大和郡山市が佐保川の西側で，それぞれ行なったものと継続した一連の発掘調査である。

ところで，中国の古代都市においては，都城の周囲にはかならず城壁をめぐらし（これを羅城という），これに開かれた城門を京城門（羅城門）とよんだことは周知のところである。たとえば，唐の西京長安には，東・南・西の三面に，それぞれ三つの京城門が開かれており，南面正面の明徳門はじめ各門には固有名詞がつけられていた。これに対し，わが国では，京城門を羅城門と呼び，また，羅城門を京城門と呼ぶということがあって（営繕令開閉門条集解），羅城門（＝京城門）は，平城京の南京極（九条）大路の中央，即ち，朱雀大路との交叉地に開かれた唯一の京城門であったと考えることができる。

さて，奈良時代の文献で，羅城門に関する記載はわずかである。『続日本記』和銅7（714）年には，新羅国からの朝貢使に対して，騎兵170人を率いて三橋に迎えている。また，宝亀10（779）年には，唐客の入京にあたり，騎兵200人，鼓吏20人を率いて，京城門外の三橋に迎えている。いずれの場合も，羅城門が平城京の表玄関として，新羅，唐からの外国使節を迎えるという，対外的には重要な意義をもっていたことが知られよう。ちなみに，羅城門外の「三橋」は，現在でも小字名として羅城門跡南に残っているのが，これにあたるものと考えられる。第二次発掘調査で発見された羅城門前の堀にかけられた橋に由来する名称でもあろうか。

また，『続日本記』には，羅城門で雨乞いをしたり，遣唐大使佐伯今毛人が餞見にあたり，羅城門に至り留まったことなどがみえる。また『唐大和上東征伝』によれば，鑑真が入京したときも，羅城門外にて迎接し，慰労したことがわかる。

このように，平城京の表玄関として，重要な意味をもっていた羅城門・羅城も，資料的にはかなりの制約があって断片的にしかわからず，不明の点が多い。

延喜左京職式によれば，平安京の場合，羅城は京の南面にのみ存在した。すなわち，南極大路十二丈，羅城外二丈（坂基半三尺 溝広一丈　犬行七尺），路広十丈，と記載され，10丈の九条大路と，羅城として築地，犬行，溝の2丈があったのである。幅10丈の九条大路は，ほかの大路よりも広い。また，延喜木工寮式によれば，垣の基底6尺の場合は，高さ1丈3尺の築地をつく

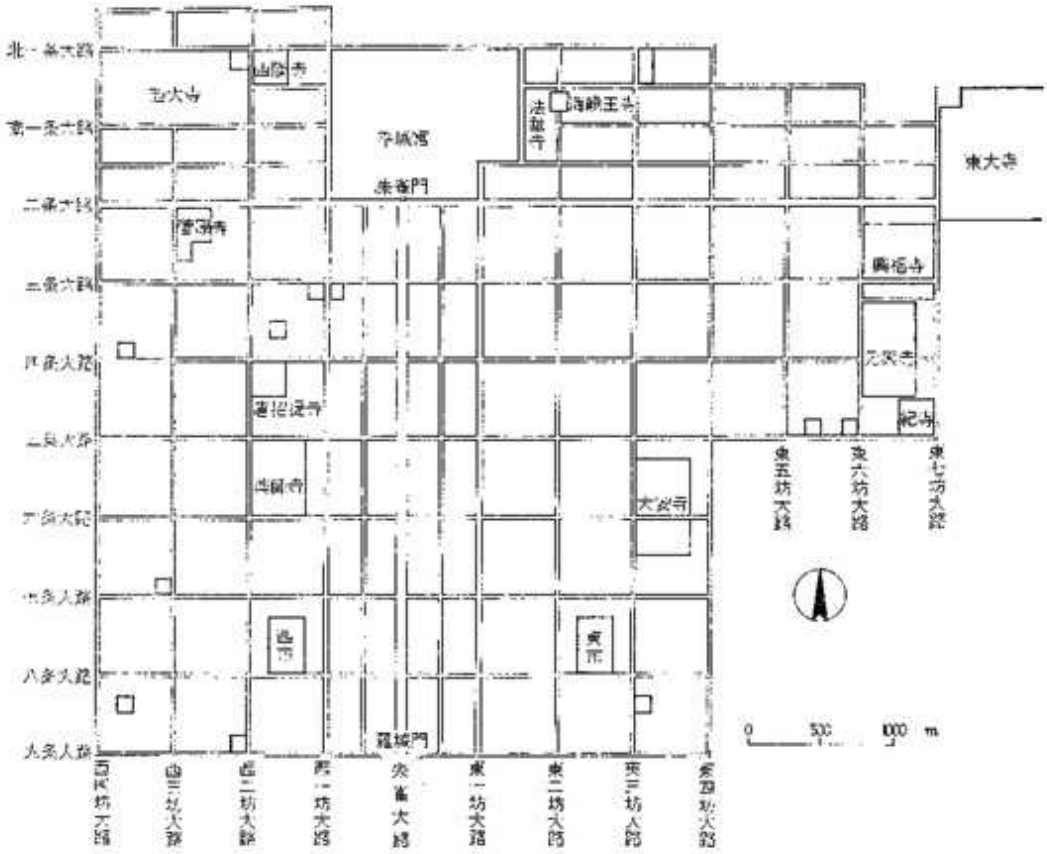


Fig. 28　平城京条坊図

る計算になっているので，羅城の高さも，これと同様に考えて，1丈3尺あったものと考えられる。平城京について考える場合も，これが一つの重要な資料であることはいうまでもない。

下ツ道を北上する外国の使節や高僧らを迎えるにあたり，平城京の南面にめぐらされた羅城と，羅城門の存在が，対外的に重要な意味をもっていたことは，以上のことからもわかる。

羅城門は，暁鼓がなり響くと開き，夜鼓がなり終わると閉じることは，宮城門の規定と同様である（宮衛令開閉門条）。また，この羅城＝京城垣を越える者には，徒1年の罪が課せられた（『法曹至要抄』所収衛禁律逃文）。

さらに，養老神祇令には，厄病神が京内に入らないよう，京の四方の最極の大路で，道饗祭を行なうことがみえる。また，延喜臨時祭式には，羅城御贖とよばれる祭式がみえ，これを羅城門で行ない，京中の鬼魅を京外に追い出すことがみられる。道饗祭，羅城御贖いずれの場合も，京城の内と外とが意識されていたことはあきらかである。

このように考えると，羅城門，羅城のもった意味もいっそう理解できよう。

Ⅵ むすび

3期にわたっておこなった平城京羅城門の調査は，門基壇，朱雀大路西側築地及び側溝，九条大路北側築地及び側溝などを明らかにするとともに，旧来から論ぜられてきた平城京条坊の研究に新たな知見をもたらしたものであった。現在，羅城門の調査は，発掘を実施した範囲も818m²と京の規模に比して極めて僅かであり，研究も緒についた所であり，多くの課題が残されている。

羅城門付近の地形は，平城京内でもっとも低い所に位置しており，門より東及び西側の山麓にかけ徐々に比高が増している。京廃絶後，次第に宮及び京内が水田化される過程で，京内の用排水とからみ，大路などの溝がかなり整備されたものと思われる。江戸時代，主要な用排水路の一つであった佐保川を京内の南半部で朱雀大路路面上に位置させたのも，主要な用排水路が地形的な制約を受けた結果によるものであろう。

佐保川が朱雀大路面に位置した結果は，先の門周辺の発掘調査をみても明らかなように，門及び周辺の大路の解明に大きな支障をきたしてきている。

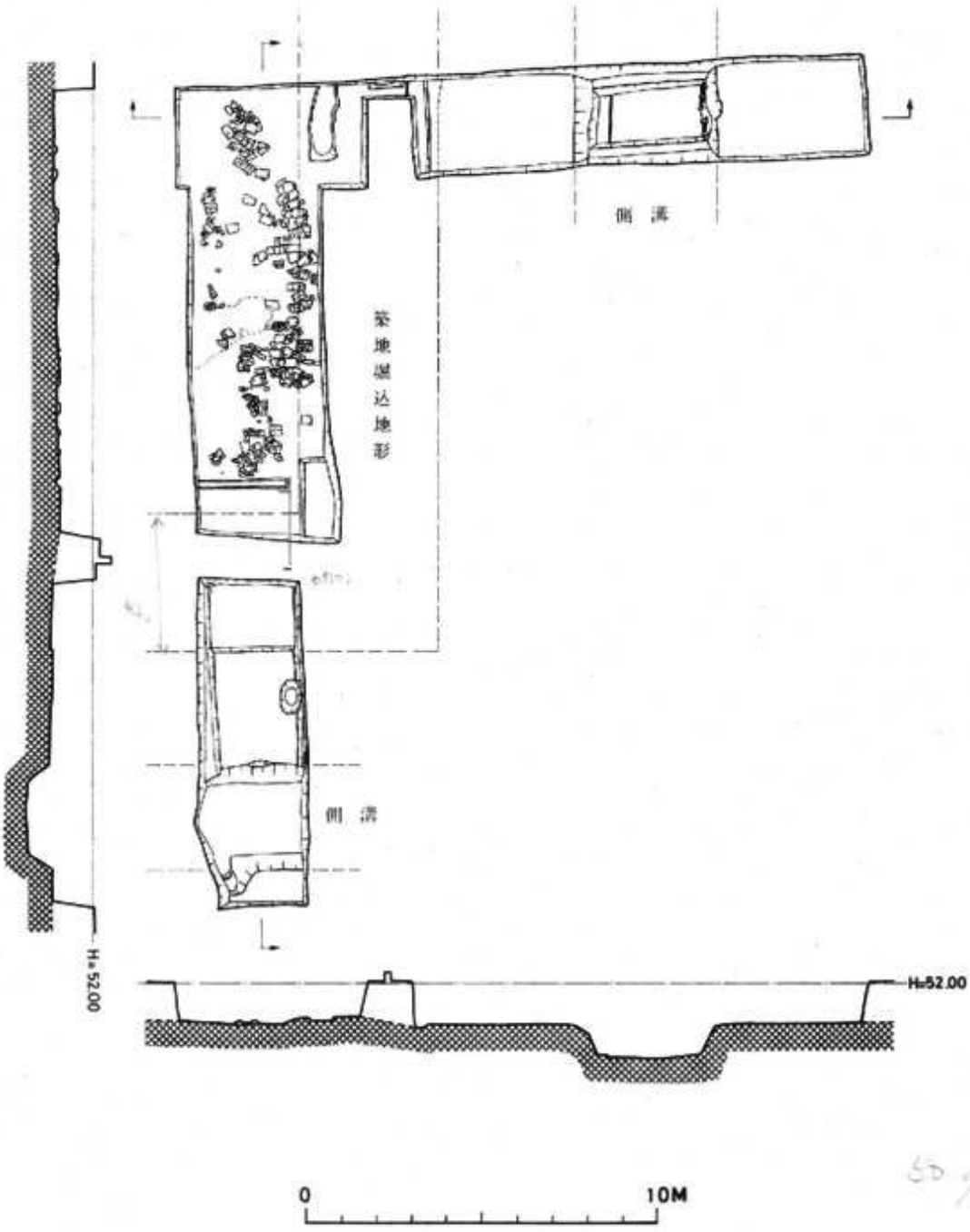
今回での調査でもっとも大きな成果は，羅城門基壇，朱雀大路西築地・側溝，九条大路北側築地・側溝の発見である。しかし，門東側地域は，かつての河川の流路下にあり，大路の諸遺構の遺存状態は充分でなかったこともあり，朱雀大路の幅員，大路中軸線の位置，門の規模など，門を中心とした京の復原に大きな課題を残している。

羅城門・朱雀大路と朱雀門及び宮内の諸殿舎との方位についてみると，大路に対し宮内の造営が南で東に約4′の振れがみられる。この造営方位の振れは，京内にある薬師寺，大安寺，唐招提寺などの地割にもほぼ近い数で認められている。この方位の振れは，宮の造営時期についての研究に大きな課題を提するものである。

宮城の造営は盆地の最北の丘陵をなかば利用しておこなわれている。今までに検出した羅城門の基壇上面と朱雀門及び大極殿基壇上面との比高をみると，朱雀門が13.6m，大極殿が21mの高さとなっている。羅城門をぬけた朱雀大路面上からみた宮の偉容は他を圧したものであろう。

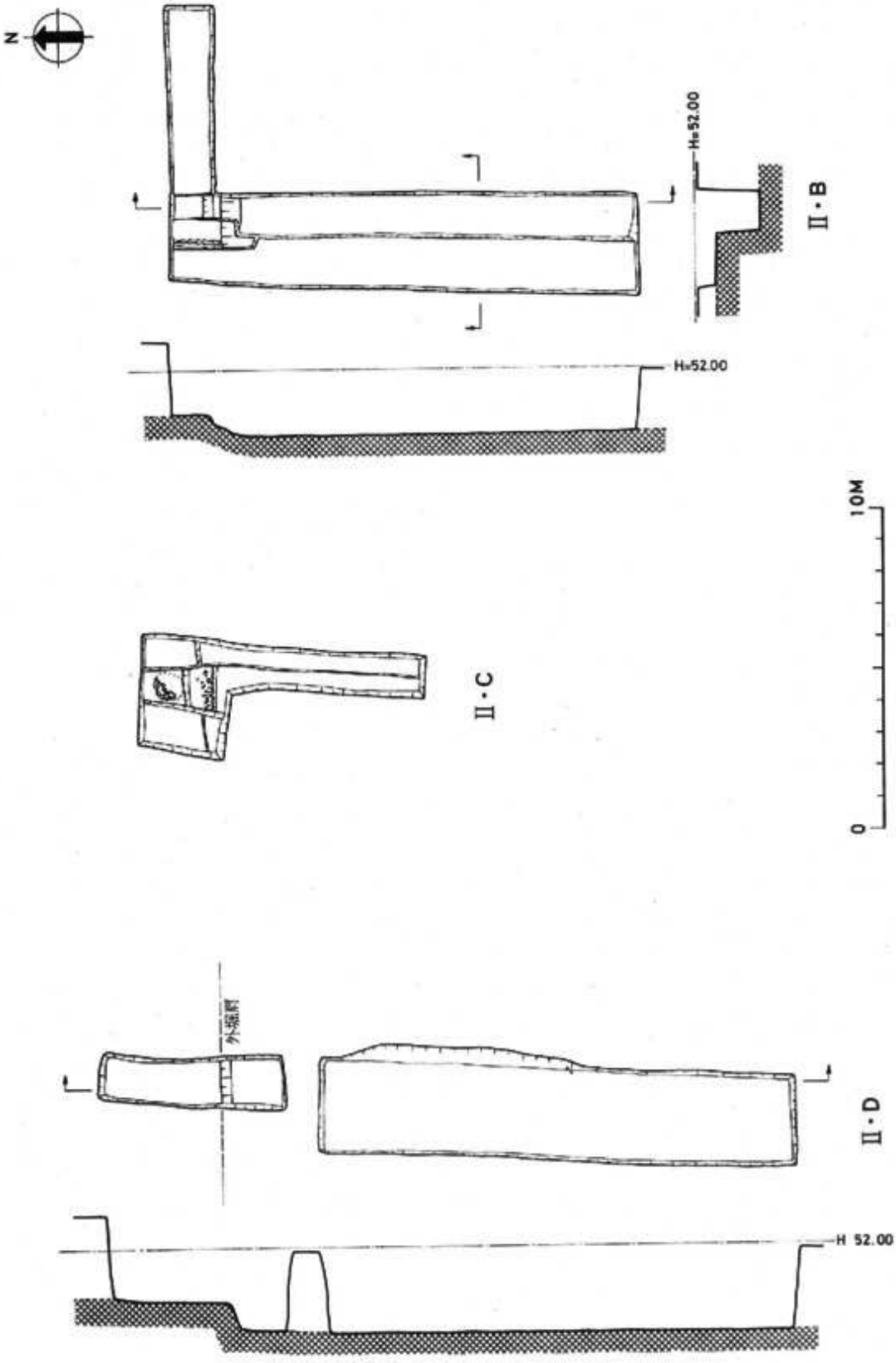
出土遺物で注目されるのは，人面を墨書した土器群・土馬などである。続紀に散見する羅城門前の雨乞いや，種々の祭祀とも関係するものであろうか。また，瓦類では，用いられた軒丸瓦，軒平瓦の組合せが宮内の組合せと若干異なっている点が注意されるが，大半が大路側溝からの出土であり，さらに検討を要しよう。すでに述べたように，羅城門の調査は広く京内の調査研究の第1歩であり，今回の調査で残された課題は多々ある。最近の京内の開発はめざましいもので，今後数年で京内の諸遺構は全く破滅の状態になる。早急に京の遺跡について，その保護と調査の方策をたてるべきであろう。

PLAN.1

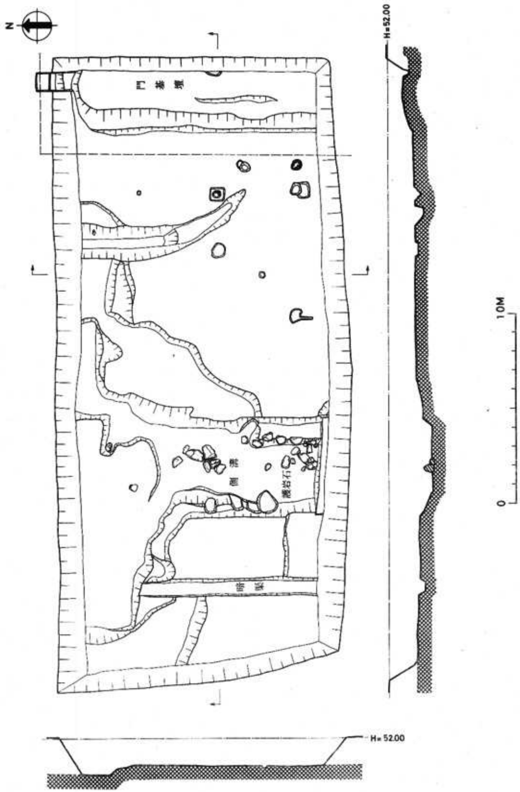


50%

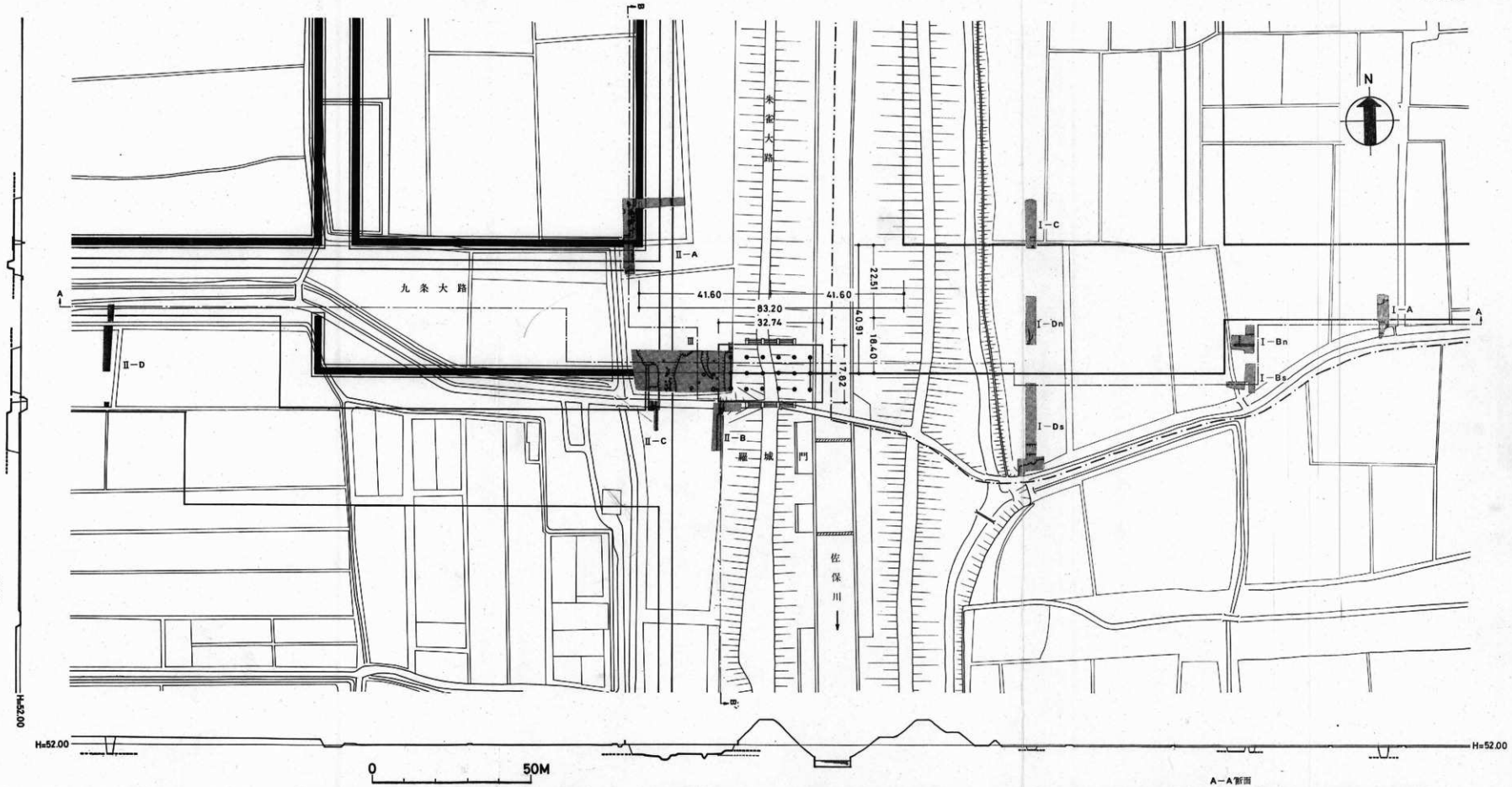
Ⅱ－A



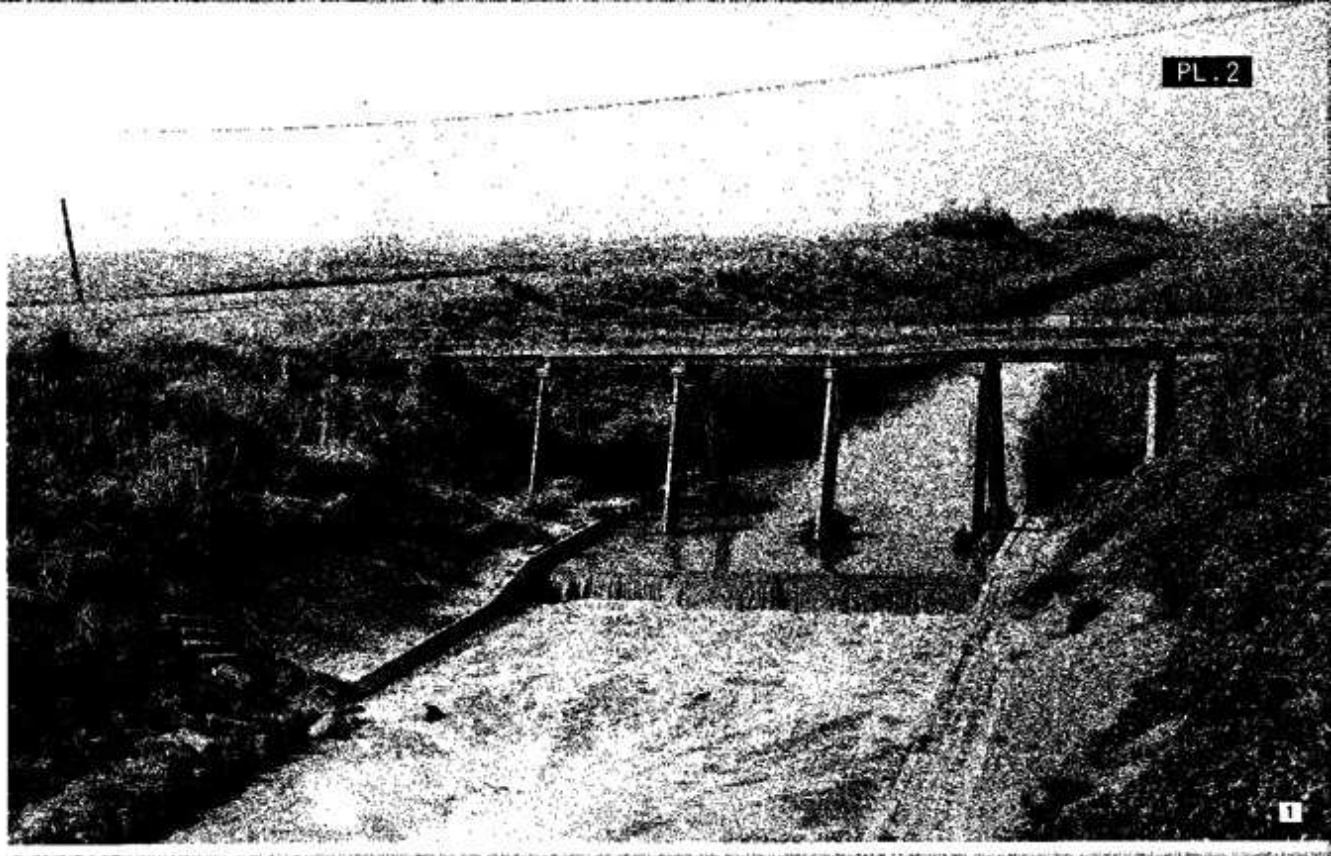
II－B・II－C・II－D



III


N
朱雀大路
九条大路
佐保川
羅城門
II−A
II−B
II−C
II−D
III
I−A
I−B
I−C
I−D
I−Bn
I−Bs
I−Dn
I−Ds
41.60
83.20
32.74
41.60
22.51
40.91
18.40
17.82
A
A'
B
B'
H=52.00
H=52.00
0
50M
B−B'断面
A−A'断面

羅城門跡附近航空写真

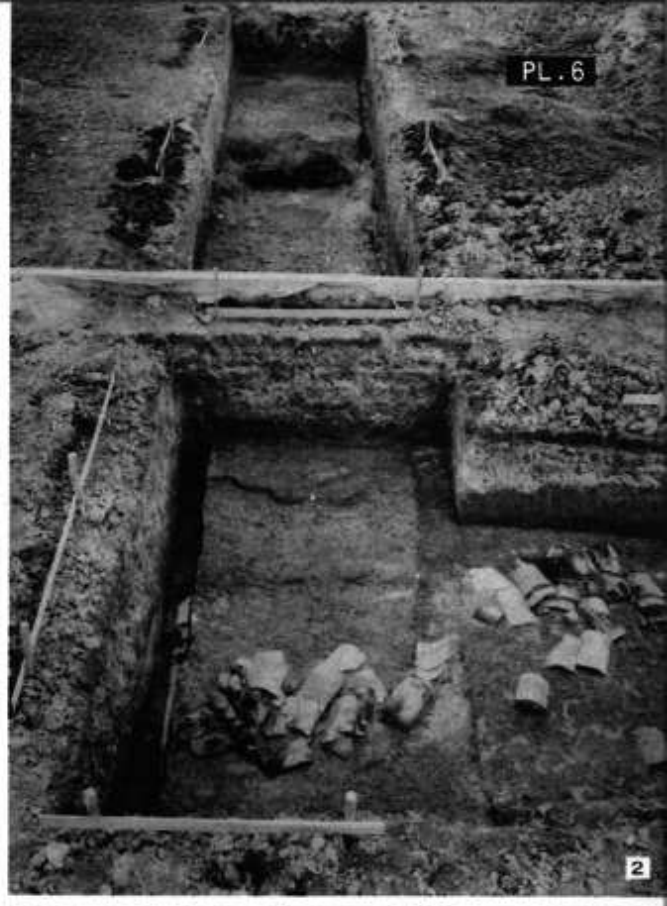


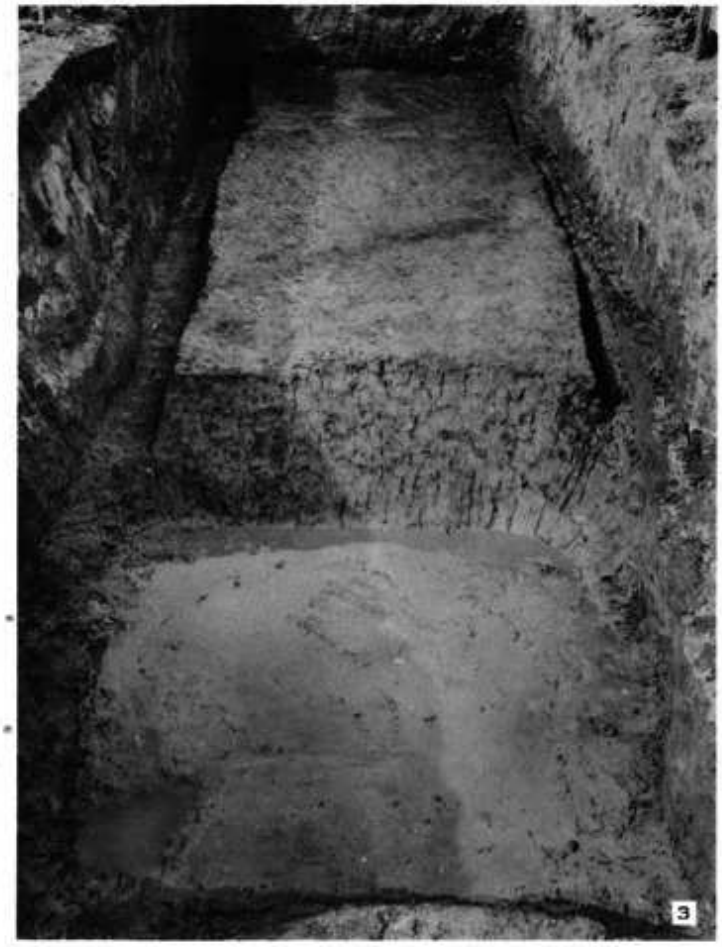
1．来生橋（南から）　2．第3次発掘調査地（西から）

1　第三次発掘調査区遺構全景（東から）　2　同　左（西から）

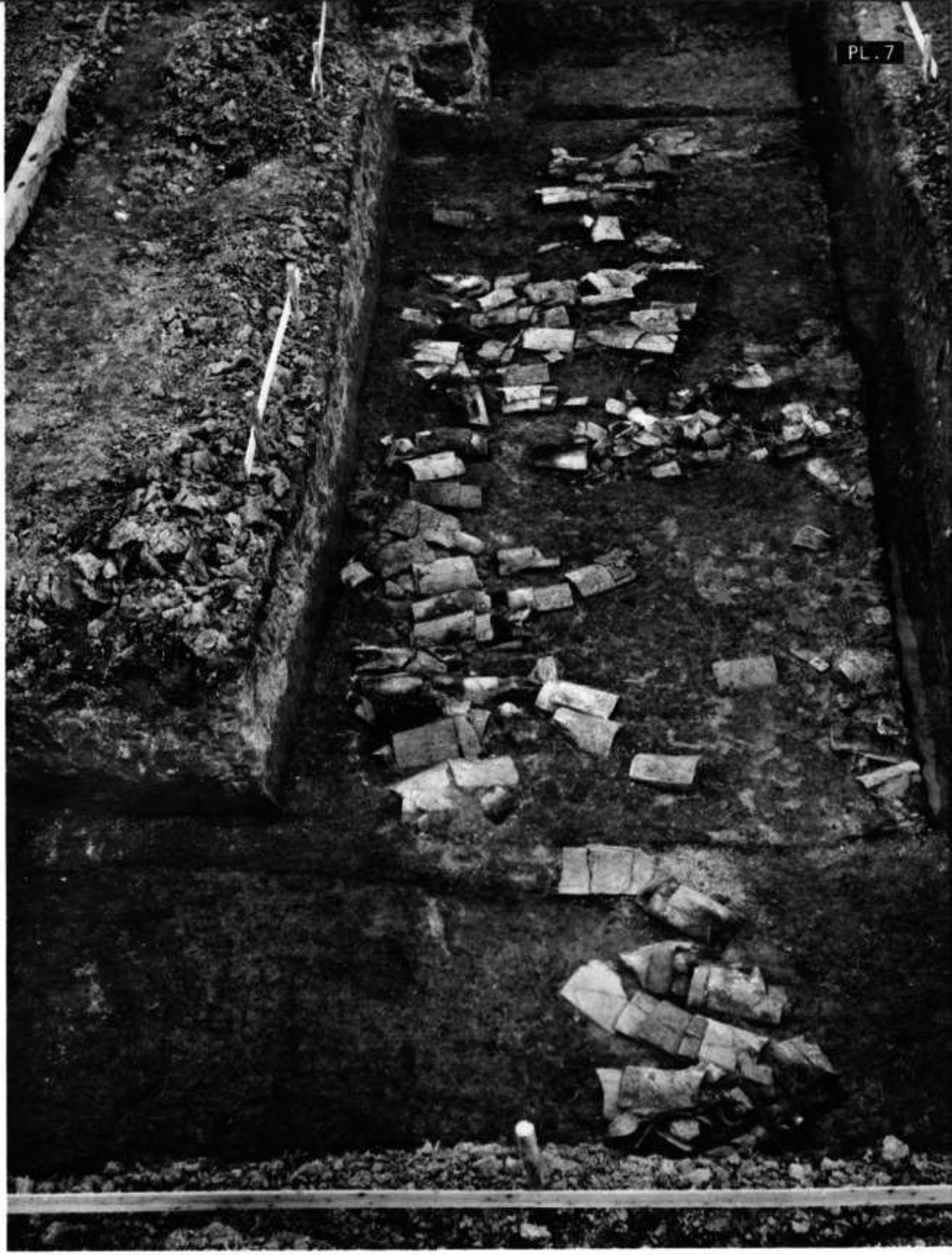
1 羅城門基壇（西から） 2 同 左 3 同 左（南から） 4 羅城門基壇断面
5 羅城門基壇（南から） 6 羅城門基壇版築（南から）

1　朱雀大路西側溝延長部（東から）　2　同（北から）　3　同　護岸石
4　同（南から）　5　暗　渠（北から）　6　同（南から）



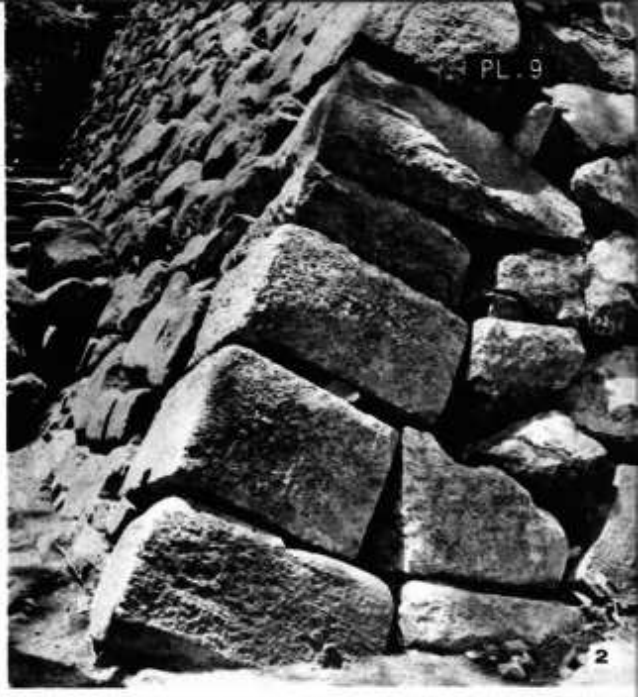


1　朱雀大路西側溝（東から）　2　朱雀大路西側築地（西から）
3　九条大路北側溝（南から）　4　九条大路北側築地・側溝（北から）

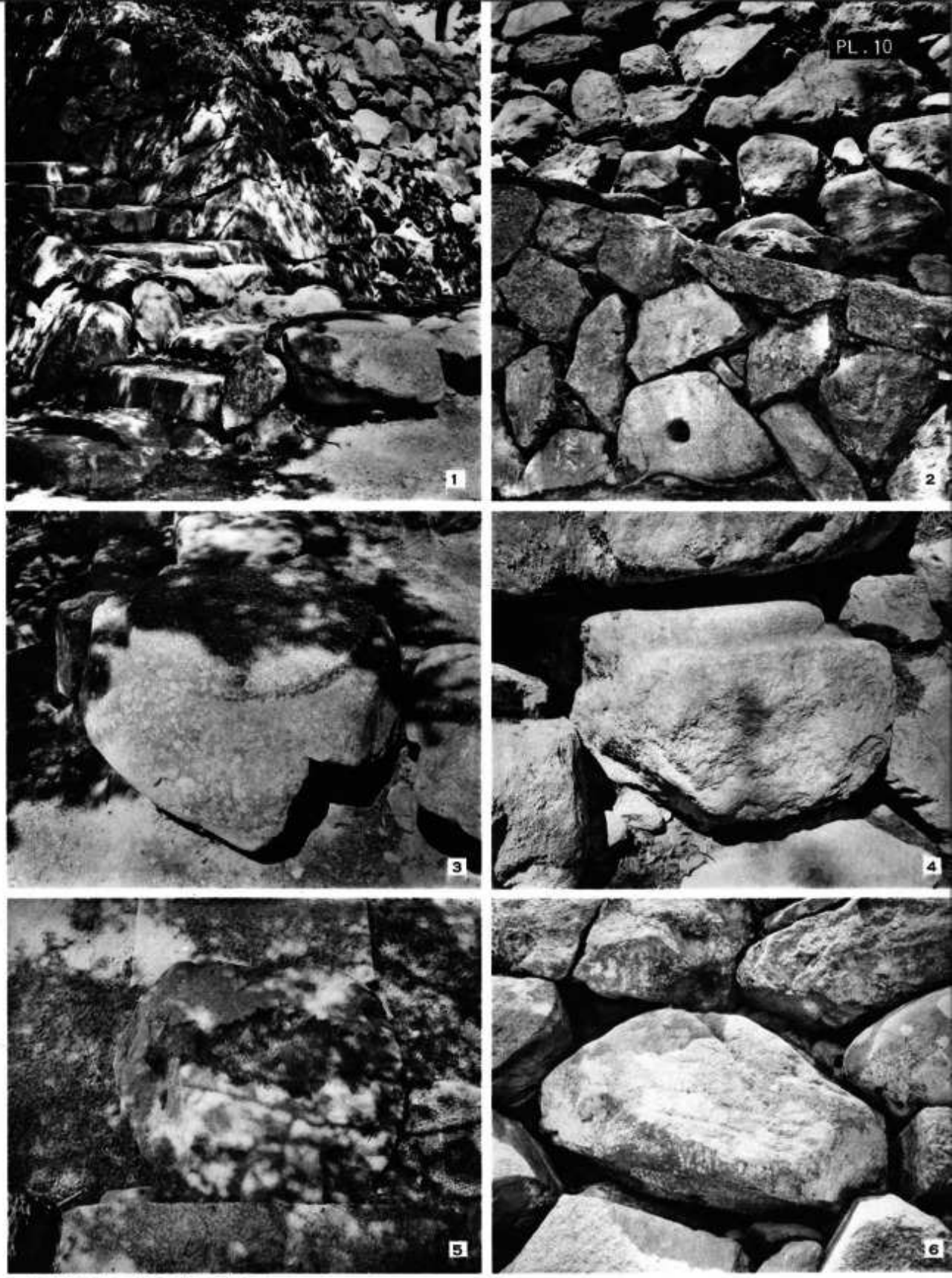


朱雀大路西側築地と瓦転落状況（北から）

1　朱雀大路西側溝護岸しがらみ（西から）　2　朱雀大路西側築地瓦転落状況（西から）



大和郡山城天主台石垣の礎石



大和郡山城天主台石垣の礎石

6133B 1

6316B 2

6684C 3

6316I 4

6285 5

6316Db 6

6308Bb 7

6316Da 8

6304 L 1

6710 Ab – 6710 C 2

6012 A 3

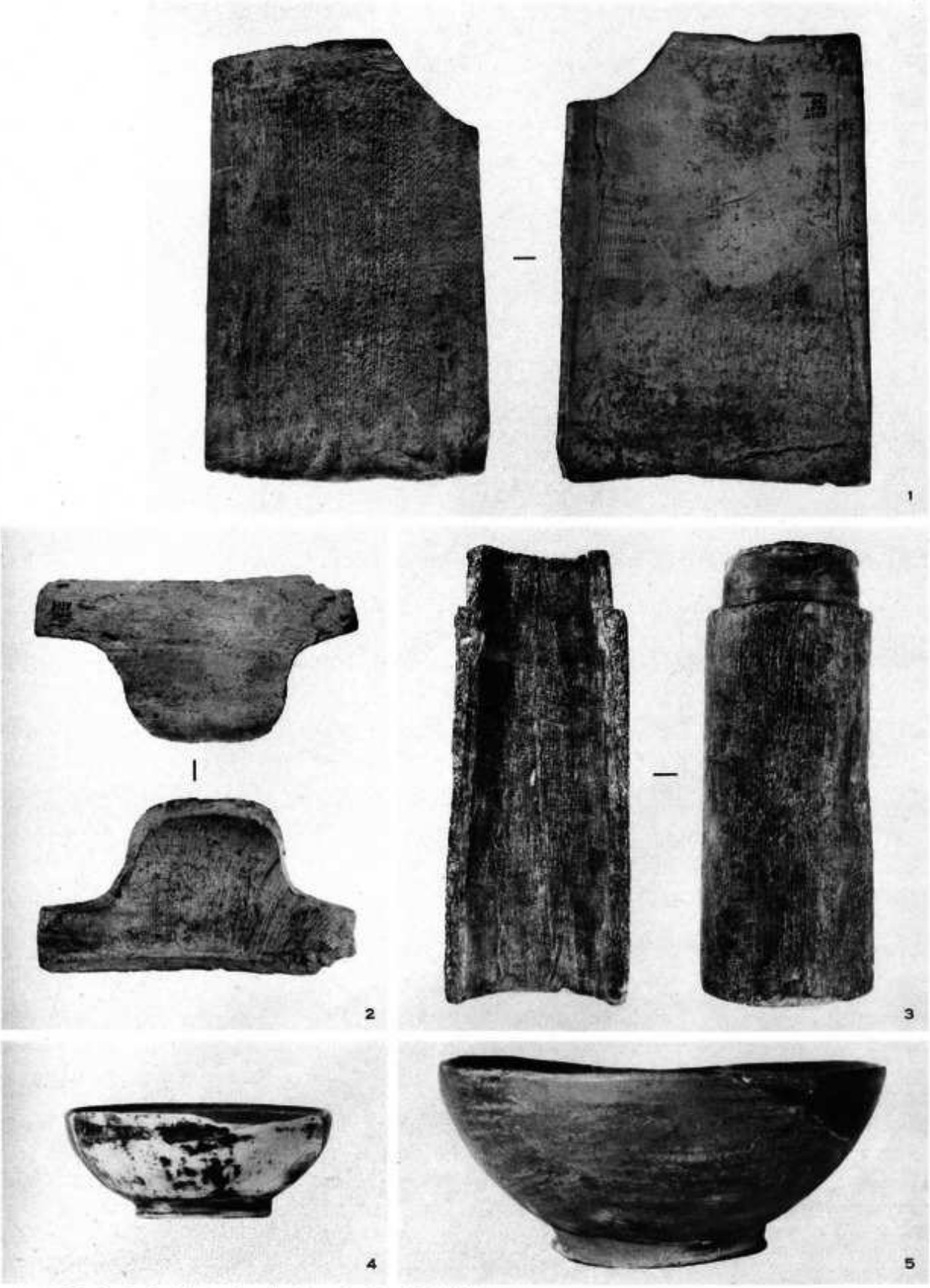
6711 4

6694 5

6711 6

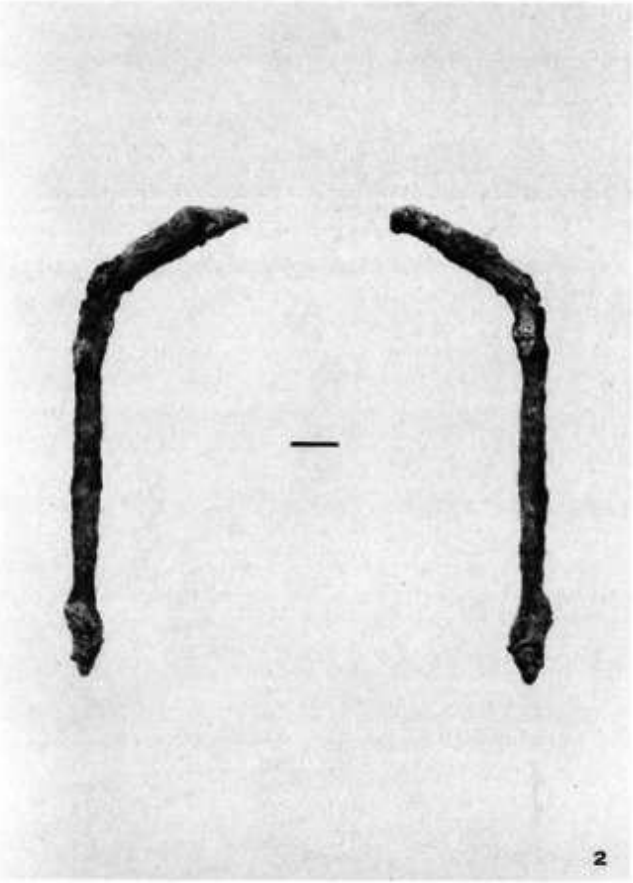
6572 7

6721 F 8

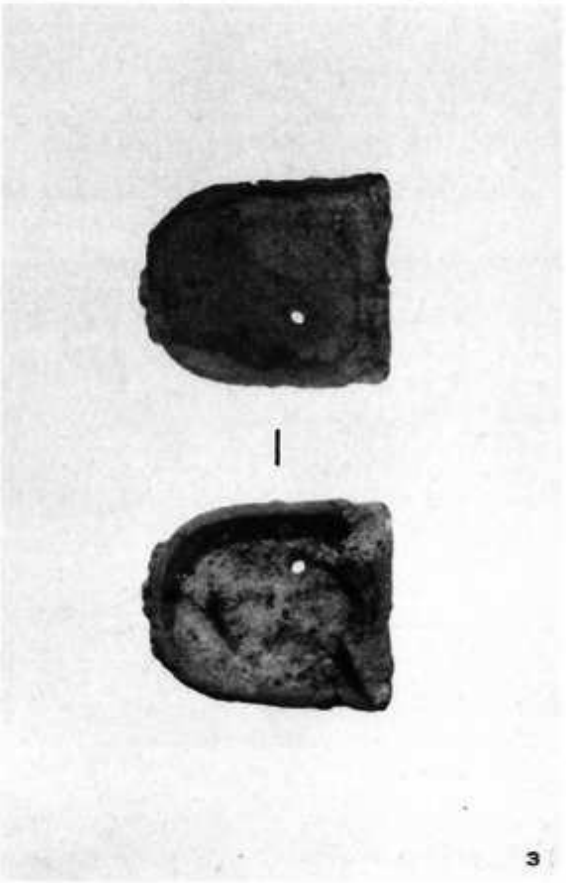


1 平 瓦 2 面戸瓦 3 丸 瓦 4・5 瓦質土器

1

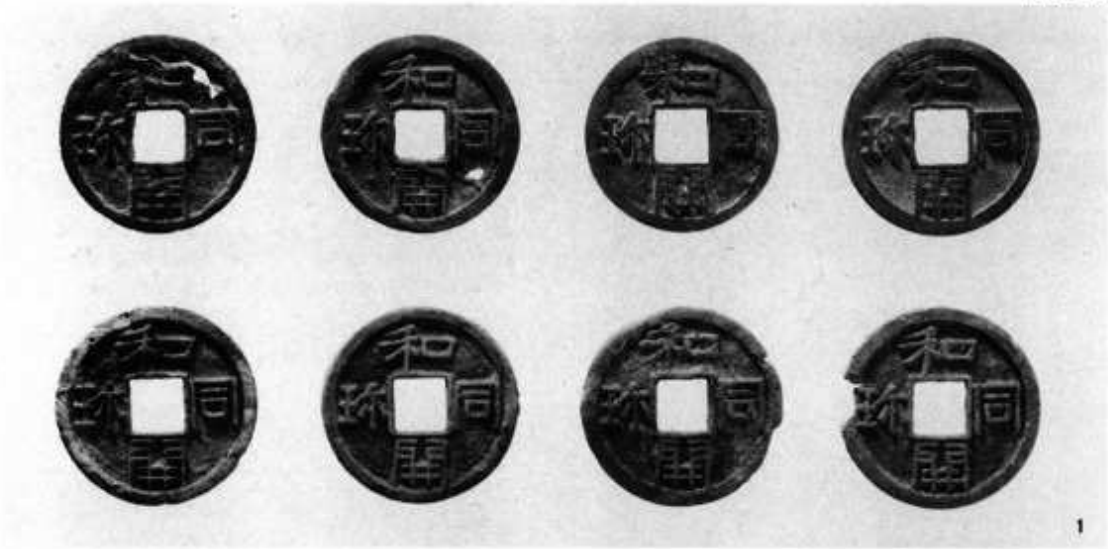


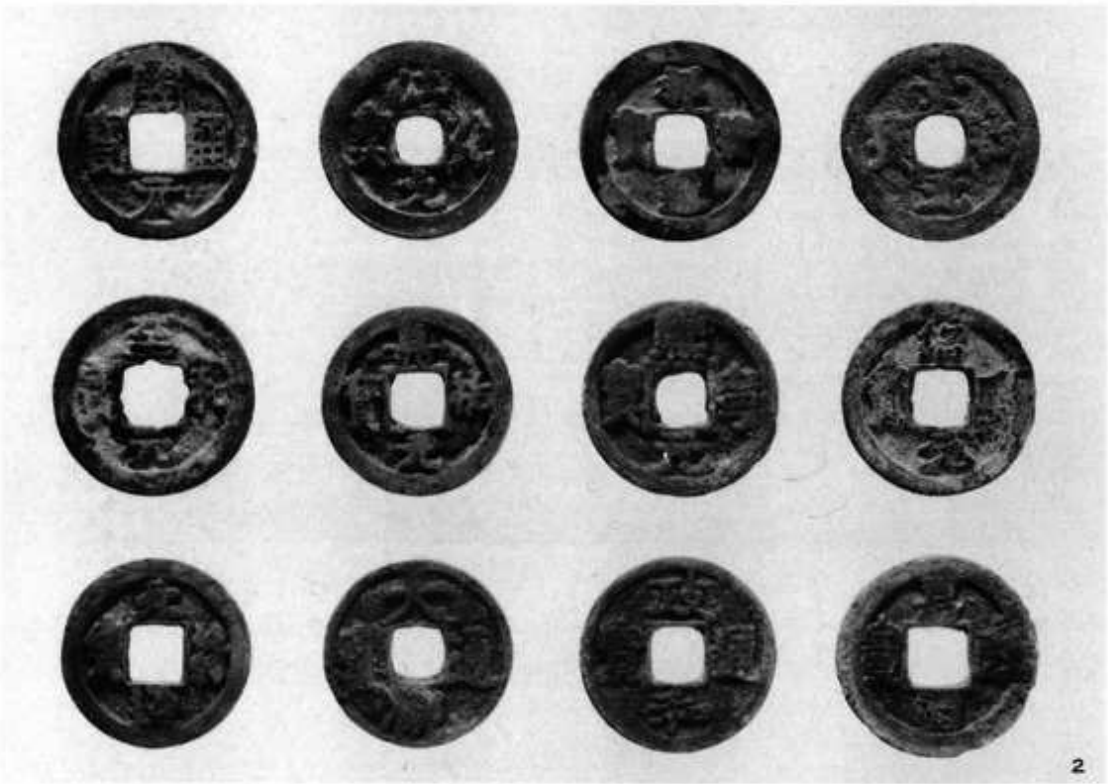
2

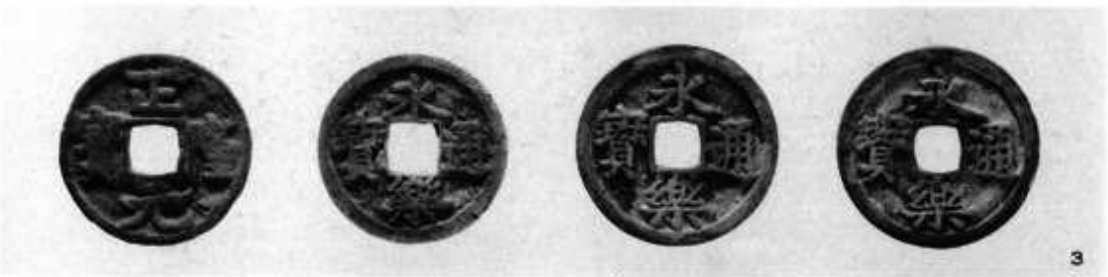


3

1 人面土器 2 釘 3 帯金具







1 和同開珎 2 宋 錢 3 金錢・明錢

1

2

3

4

5

槿 1 槿先木口 2 拝み組手 3 木舞えつり 4 桁あたり 5 全 景（上面）

この報告は，調査結果についての調査員全員の討議にもとづき，Ⅰ浅野清，Ⅱ高島忠平，Ⅲ1・3中村春寿・高島忠平，Ⅲ2松下正司，Ⅲ3・Ⅳ1・2・3・4・6菅原正明，Ⅳ5・Ⅴ3森郁夫・岡本東三，Ⅴ1伊東太作，Ⅴ2細見啓三，Ⅴ4横田拓実，Ⅵ八賀晋が分担執筆し，高島忠平が編集した。なお，本書の編集・図面作成にあたって金井しん・毛利光用子が協力した。写真は伽幹雄・真木礼子が担当した。

平城京羅城門跡発掘調査報告

1972年3月

発行　大和郡山市教育委員会

編集　奈良国立文化財研究所

印刷　有限会社真陽社